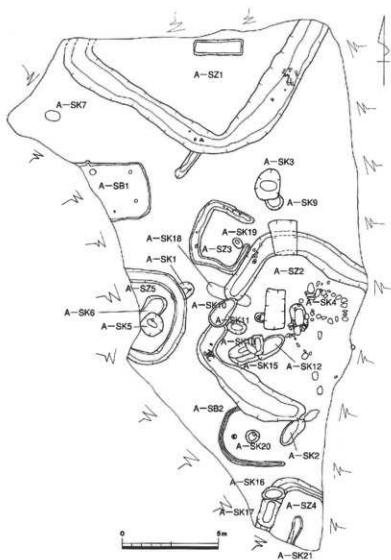


第3章 A区の調査

東西に開析された「おもどろの沢」とよばれる小浸食谷によって牛川段丘は中野支丘と浪ノ上支丘に分断されている。A区は浪ノ上支丘の北東部に位置し、豊川の沖積低地に突き出た半島状の段丘縁端部を占めている。浪ノ上支丘の標高は約20mを測る。沖積低地は水田として利用されているが、水田面との比高差は約16mあり、段丘崖となっている。支丘の裾をぬうように東から西に牟呂用水が建設されている。南流する豊川や西流する神田川によって形成された沖積低地の北側には白石遺跡や高井遺跡の存在する玉川段丘が一望できる。さらに、東に石巻山を北には本宮山を眺めることができる場所である。

調査面積は450㎡である。A区内から竪穴住居址（A-SB）が2軒、土坑（A-SK）が22基、



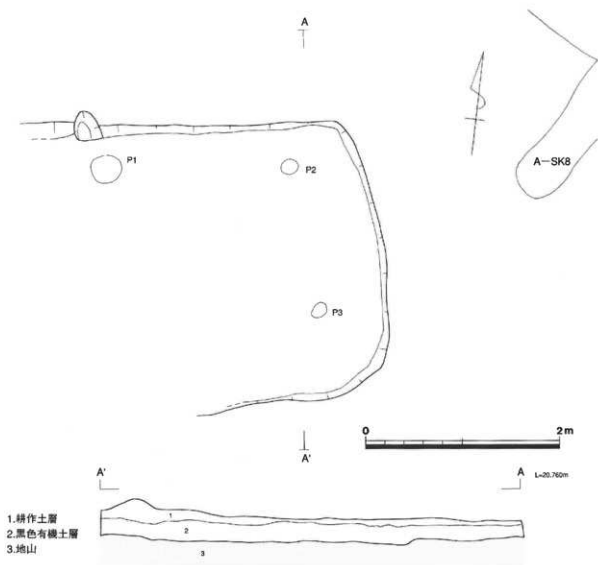
挿図第32 A区における遺構の分布

方形周溝墓（A-SZ）が5基検出された。

竪穴住居址A-SB1は、A区内の北西に所在しており、工事により竪穴住居址の西側は削平されている。この竪穴住居址（A-SB1）から南南東に約11m離れた所に竪穴住居址A-SB2がある。この竪穴住居址A-SB2は、方形周溝墓A-SZ2の南西周溝によって切られ、土壌A-SK2によっても切られている。さらに南東隅は工事により削平されている。

土壌（A-SK）は、A区内の北側に土壌A-SK3・A-SK7・A-SK8・A-SK9の4基が所在している。A区の中央部の方形周溝墓A-SZ2とA-SZ5の周辺には土壌A-SK1・A-SK4・A-SK6・A-SK10・A-SK15・A-SK18・A-SK19・A-SK22の13基が群集している。A区の南側には土壌A-SK2・A-SK16・A-SK17・A-SK20・A-SK21の5基が所在している。

方形周溝墓（A-SZ）は、5基検出されたが、方形周溝墓A-SZ1はA区の最も北側に位置している。方形周溝墓A-SZ1の北側は工事により削平されていた。方形周溝墓A-SZ1の南側2



挿図第33 竪穴住居址A-SB1実測図

mには、方形周溝墓A-SZ3が存在している。この方形周溝墓A-SZ3の南西1mには方形周溝墓A-SZ5が存在する。さらに、A-SZ3の周溝に接して方形周溝墓A-SZ2がある。方形周溝墓A-SZ3の南側3mの所に方形周溝墓A-SZ4が存在している。

第1節 竪穴住居址

A区内から検出された住居址は竪穴住居址A-SB1とA-SB2の2軒である。

1、竪穴住居址A-SB1

(1) 遺構 (挿図第32、挿図第33、図版第11の1)

竪穴住居址A-SB1は、A区内の北西にあり、方形周溝墓A-SZ1とA-SZ5の間に位置する。西壁と南壁の一部・北壁の一部は工事により欠損している。削平面から床面までの深さは4cmである。南壁と東壁は直線状を呈している。現存する北東角と南東角は隅円となり、東壁は膨らみをもった曲線である。平面形は小判形に近いものと考えられる。床面の南北の長さは2.80m、東西の長さは欠損しているが、現状では3.00mを測り、東西幅の方が長い。壁溝は認められない。柱穴はP1 (32×24×-)、P2 (20×14×-)、P3 (20×16×-) の3本(註1)が検出されたが、南西隅の1本は床面が削平されていたので不明である。柱穴間の長さはP1~P2が2.00m、P2~P3が1.60mである。貯蔵穴と炉址は検出されなかった。

(2) 遺物 (挿図第44の1~13)

5・7は、床面から検出した胴部破片である。5は、外面に荒い横位の条痕を施し、7は荒い斜位の条痕を施している。

1は、竪穴埋土の黒色土層から検出した。深鉢の口縁部破片で、口端を肥厚させ、内面を面取りして段を有している。外面には横位の荒い条痕を施している。2は、同じく黒色土層から検出した深鉢の口縁部破片である。口端は丸く仕上げられており、この面に薄い横方向の条痕を施し、外面には横位の荒い条痕を施している。4は、黒色土層から検出した深鉢の胴部破片で、外面に斜位の荒い条痕を施している。6は、黒色土層から検出した胴部破片で、外面には条痕が施されている。8は、黒色土層から検出した深鉢の胴部破片で、外面には斜位の条痕が施されている。

9は、黒色土層上部から検出した壺の下胴部破片である。外面にはこまかなハケメが認められる。

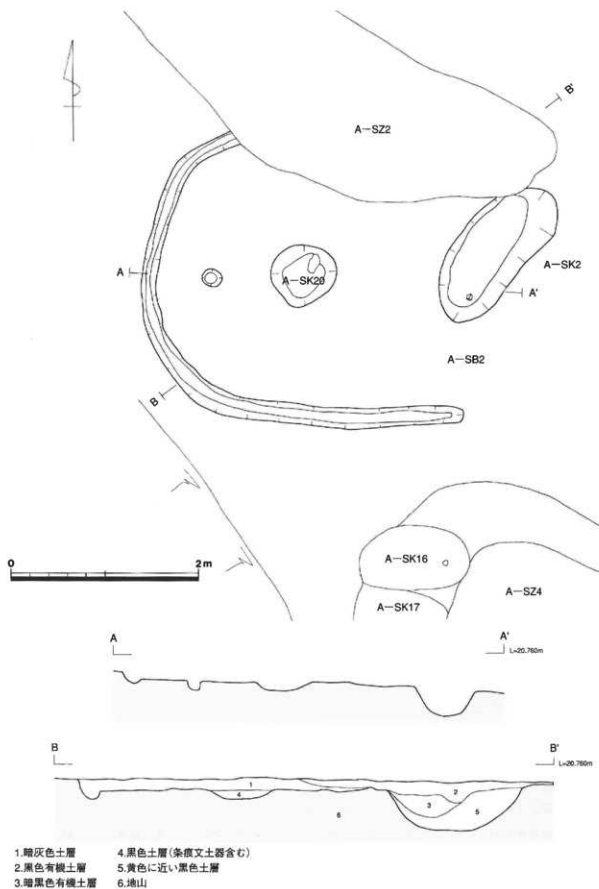
3は、黒色土層から検出した壺の底部破片で、底面には指ナデで凹面を造り出している。10は黒色土層上部から検出した壺の口縁部破片である。口端を角張らせ仕上げている。11は黒色土層上部から検出した高杯の杯部破片である。

12は、黒色土層上面から出土した須恵器蓋杯の身部破片である。

13は、床面から検出した石皿で、上面には深さ5mmほどの浅い洋弓状のスリ面をもつ。ほぼ中央に蔽打による凹みのあることから、破損後、凹石として転用されたと考える。

1・2、4~8は、条痕文土器であり、樫王式土器(註2)である。

9は、弥生時代中期後葉の長床式土器(註3)と考えるものである。



挿図第34 竪穴住居址A-SB2実測図

3、10・11は、古式土師器、または土師器と考えられる。

12は、この地方の須恵器第2型式から第3型式（註4）と考えられる須恵器である。

A-SB1が営まれたのは、床面から出土した土器から樫王式土器の時期ととらえられる。

2、竪穴住居址A-SB2

（1）遺構（挿図第32、挿図第34、図版第11の2）

竪穴住居址A-SB2は、A区内の南側にあり、方形周溝墓A-SZ2とA-SZ4の間に位置する。北壁は方形周溝墓A-SZ2に切られ、東壁は工事により欠損している。削平面から床面までの深さは10cmである。現存する南壁は直線状を呈している。西壁はゆるやかに膨らみをもつ曲線を呈している。現存する床面の東西の長さは3.50m、南北の長さは2.72m、床面積（註5）は約9㎡で平面形は小判形が推測される。壁溝は、幅18～24cmで、深さは6～10cmである。柱穴は推定では2個だが、P1（22×16×9）の1個のみ検出された。東側の柱穴は検出されなかった。貯蔵穴と炉址は土壌A-SK20によって壊されたためか検出されなかった。

（2）遺物（挿図第44の14～18、図版第11）

14は、A-SB2の床面から検出した深鉢の胴部破片で、外面に荒い斜位の条痕を施している。15・16は、ともに埋土中から検出した深鉢の胴部破片である。外面には斜位の条痕が認められる。また、胎土、調整などはA-SB1の土器と似ている。

17は、埋土中から検出した壺の下胴部から底部である。18も埋土中から検出した壺の口縁部破片である。単純口縁で、口縁部が外反し、内外面にハケメが認められる。口端は面取りしている。

14～16は、条痕文系土器の樫王式土器と考えられる。

17は、調整、胎土から弥生時代中期後葉の長床式土器と考えられるものである。

18は、古墳時代前期の古式土師器である。

A-SB2の時期は、床面から出土した14、埋土中から出土した15・16から、A-SB1と同時期と考える。また、18は、北側で本竪穴A-SB2を切るA-SZ2の出土遺物と類似することから溝からの混入とも考えられる。

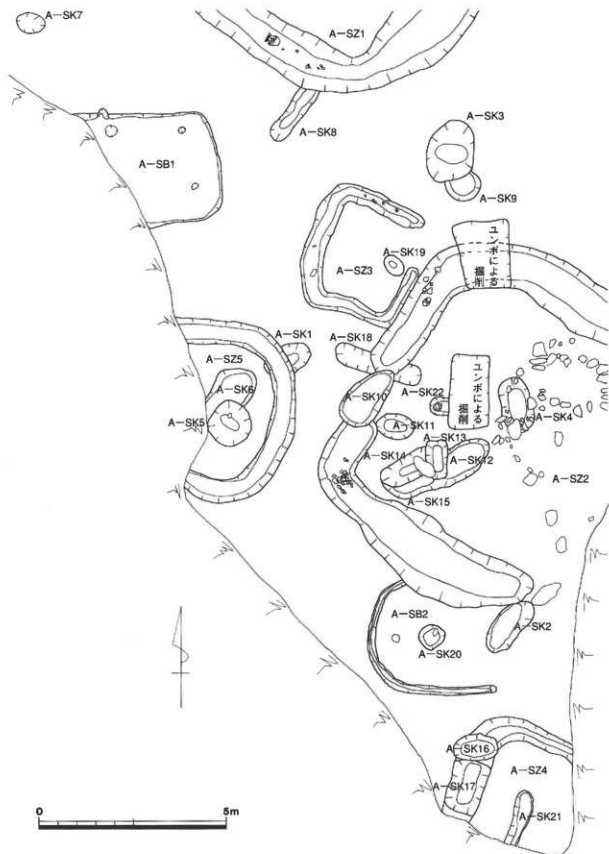
第2節 土壌

A区内で検出された土壌（A-SK）は、22基である。そのうち、A-SK1・A-SK3～A-SK5・A-SK9・A-SK13・A-SK16の7基は土壌内から遺物が確認された。しかし、A-SK2・A-SK6～A-SK8・A-SK10～A-SK12・A-SK14～A-SK15・A-SK17～A-SK22の15基からは遺物が検出されなかった。そのためこれらの土壌の時期は不明である。

1、土壌A-SK1

（1）遺構（挿図第35、挿図第43）

土壌A-SK1は、A区内中央に位置し、方形周溝墓A-SZ5の周溝に切られている。平面形は



挿図第35 土壌A-SK1～SK22の位置

楕円形である。規模は長径1.50m、短径0.80m、深さ28cmである。長軸は、 $N-54^{\circ}-E$ である。

(2) 遺物 (挿図第44の19・20)

19・20は、A-SK1の黒色土層から検出した深鉢の胴部破片で、19は斜位の薄い条痕、20には横位の薄い条痕が施されている。

これらの土器は、縄文晩期中葉の稲荷山式土器(註6)の可能性がある。

2、土壙A-SK2 (挿図第34、挿図第35)

土壙A-SK2は、A区内の南に位置し、方形周溝墓A-SZ2の南側周溝と接している。平面形は長楕円形で、断面形はU字形をしている。規模は長径1.72m、短径0.78m、深さは30cmである。長軸は $N-38^{\circ}-E$ である。

3、土壙A-SK3

(1) 遺構 (挿図第35)

土壙A-SK3は、方形周溝墓A-SZ1とA-SZ2の間に所在している。平面形は不整形である。規模は長径1.70m、短径1.16mである。長軸は $N-15^{\circ}-E$ である。土壙A-SK3は土壙A-SK9を切って造られている。そのことから土壙A-SK3は土壙A-SK9より新しいと言える。

(2) 遺物 (挿図第44の21)

21は、A-SK3の黒色土層から検出した深鉢の口縁部破片であり、口端はきついナデ調整により丸味をおび、外面で横線状の凹みをもつ。口縁部外面には薄い条痕が認められる。

この土器は縄文晩期中葉の稲荷山式土器と考えられる。

4 土壙A-SK4

(1) 遺構 (挿図第35、挿図第39)

土壙A-SK4は、方形周溝墓A-SZ2の内に所在する。平面形は隅円長方形で断面形は浅い平底形である。規模は長径1.42m、短径0.80mである。長軸は $N-13^{\circ}-W$ である。

(2) 遺物 (挿図第44の22~25)

22・23・24は、A-SK4の黒色土層から検出した深鉢の口縁部破片である。22は、口端を丸く仕上げ、外面は無調整で輪積痕が残る。23・24は、いずれも外面に横位の条痕を施し、口端部は外側にむかい2段の面取りを行ない、張り出している。25は、深鉢の胴部破片であり、内面に明確なケズリ、外面に斜位の条痕が認められる。

これらの土器は、樫王式土器である。

5 土壙A-SK5

(1) 遺構 (挿図第35、挿図第43)

土壙A-SK5は、方形周溝墓A-SZ5の内に所在する。平面形は隅円長方形である。規模は径1.14mである。長軸は $N-52^{\circ}-W$ である。土壙A-SK5は土壙A-SK6を切ってつくられている。

ることから、土壇A-SK6より土壇A-SK5の方が新しいと言える。

(2) 遺物 (挿図第44の26)

26は、A-SK5の埋土中から検出したチャート製の凹基無茎鍬である。剥片の表裏面を残し、全側縁に押圧剥離を加え整形している。

本石鍬は、形態、製作法などから、A-SK4と同時期の製品と考えられる。

6 土壇A-SK6 (挿図第35、挿図第43)

土壇A-SK6は、方形周溝墓A-SZ5の内に所在する。平面形は楕円形で、断面形はU字形である。規模は長径2.08m、短径1.08m、深さは70cmである。長軸はN-47°-Eである。土壇SK6は、土壇A-SK5に切られていることから、土壇A-SK6は土壇A-SK5よりも古いと言える。

7 土壇A-SK7 (挿図第35)

土壇A-SK7は、A区内の北西にあり、方形周溝墓A-SZ1の西に位置する。平面形は楕円形である。規模は長径0.84m、短径0.46mである。長軸はN-87°-Eである。

8 土壇A-SK8 (挿図第35)

土壇A-SK8は、A区内の中央にあり、方形周溝墓A-SZ1の南西周溝に切られている。土壇A-SK8は細長い溝状をなし、現状では長径1.74m、短径0.46mである。長軸はN-35°-Eである。土壇の北側部分を、方形周溝墓A-SZ1に切られていることから、土壇A-SK8は方形周溝墓A-SZ1よりも古いと言える。

9 土壇A-SK9

(1) 遺構 (挿図第35)

土壇A-SK9は、A区内の東に位置し、土壇A-SK3に切られている。平面形は、ほぼ円形で、径は0.94mである。長軸はN-45°-Wである。土壇A-SK9は土壇A-SK3に切られていることから、土壇A-SK9は土壇A-SK3より古いと言える。

(2) 遺物 (挿図第44の27~29、図版第13の5・6)

27・28は、A-SK9の埋土中から検出したもので同一個体である。27は、深鉢の口縁部破片である。小さな山形の波状口縁下に二枚貝側縁による刺突文列が並ぶ。28は、口端を欠くものである。29は、同じく埋土中から検出した横長剥片であり、側縁に使用痕を残す。

27・28は、いわゆる「オセンベ土器」とよばれる縄文時代前期の石塚下層式土器(註7)であろう。

10 土壇A-SK10 (挿図第35、挿図第39)

土壇A-SK10は、A区内の中央にあり、方形周溝墓A-SZ2の西側陸橋部に設けられている。平面形はだるまのような形で、長径1.84m、短径1.00mである。長軸はN-30°-Eである。土壇A-SK10は方形周溝墓A-SZ2を切ってつくられていることから、土壇A-SK10は方形周溝墓A-

SZ2より新しいと言える。

11 土壌A-SK11 (挿図第35、挿図第39)

土壌A-SK11は、土壌A-SK10の東隣に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.04m、短径0.68mである。長軸はN-78°-Wである。

12 土壌A-SK12 (挿図第35、挿図第39)

土壌A-SK12は、方形周溝墓A-SZ2の内に所在する。土壌A-SK13に、西側を切られており、平面形は不整形で長軸はN-52°-Eである。規模は、長径1.60m、短径0.88m、深さ60cmである。切り合い状態からA-SK12はA-SK13より古いと言える。

13 土壌A-SK13

(1) 遺構 (挿図第35、挿図第39)

土壌A-SK13は、方形周溝墓A-SZ2の南西に位置する。土壌A-SK13は土壌A-SK12・A-SK14・A-SK15を切っていることから、これら3基の土壌より、新しいと言える。平面形は小判形で、規模は長径1.04m、短径0.6mである。長軸はN-5°-Wである。

(2) 遺物 (挿図第44の30・31)

30・31は、A-SK13の埋土中から検出した深鉢の下胴部破片である。外面には、斜位の薄い条痕が施されている。

これらの土器は、胎土・調整・色調から、A-SK1と同時期の可能性がある。

14 土壌A-SK14 (挿図第35、挿図第39)

土壌A-SK14は、方形周溝墓A-SZ2内の南西隅に位置する。平面形は、不整形で規模は、長径1.30m、短径0.70である。長軸はN-64°-Eである。土壌A-SK14は、土壌A-SK15を切り土壌A-SK13に切られている。この切り合いから、土壌A-SK15が最も古く、次に土壌A-SK14が続き、土壌A-SK13が新しいと言える。

15 土壌A-SK15 (挿図第35、挿図第39)

土壌A-SK15は、方形周溝墓A-SZ2の西隅に位置している。土壌A-SK15は土壌A-SK14とA-SK13に切られているため土壌の大半が欠損している。現状での規模は、長径1.30m、短径0.90mである。長軸はN-62°-Eである。土壌(A-SK)の切り合いから土壌A-SK15が最も古いと考えられる。

16 土壌A-SK16

(1) 遺構 (挿図第35、挿図第42)

土壌A-SK16は、A区内南の端に位置する。土壌A-SK16は方形周溝墓A-SZ4の西側周溝

を切ってつくられている。平面形は楕円形で規模は長径1.20m、短径0.68m、深さ20cmである。長軸はN-80°-Eである。切り合いから土壌A-SK16は方形周溝墓A-SZ4よりも新しいと言える。

(2) 遺物 (挿図第44の32)

32は、A-SK16の埋土中から検出したものである。壙の胴部から底部にかけてのものである。胴部上方には二枚目による細かな刺突文列が施されている。

本品のように胴部が直線状に立上がる同じ形状をもつ壙44がA-SZ1から出土している。

17 土壌A-SK17 (挿図第35、挿図第42)

土壌A-SK17は、土壌A-SK16に接して南側に位置している。方形周溝墓A-SZ4の西側周溝と重複している。平面形は隅田長方形で、規模は長径1.42m、短径0.90mである。長軸はN-21°-Eである。切り合いから土壌A-SK17は方形周溝墓A-SZ4より新しいと言える。

18 土壌A-SK18 (挿図第35、挿図第39)

土壌A-SK18は、A区内の中央に位置し、方形周溝墓A-SZ2の周溝に切られ、さらに土壌SK-10によっても切られている。平面形は、長楕円形をしており、規模は現状で長径2.50m、短径0.64mである。長軸はN-66°-Wである。切り合いから土壌A-SK18が古く、方形周溝墓A-SZ2、そして最も新しいのが土壌A-SK10である。

19 土壌A-SK19 (挿図第35、挿図第40)

土壌A-SK19は、A区内の中央に位置し、方形周溝墓A-SZ3の陸橋近くに設けられている。平面形は楕円形で、断面形はU字形をしている。規模は長径0.62m、短径0.46m、深さ24cmを測る。長軸はN-54°-Wである。

20 土壌A-SK20 (挿図第34、挿図第35)

土壌A-SK20は、竪穴住居址A-SB2内に所在する。平面形はほぼ円形で、断面形は浅い平底形をしている。規模は長径0.80m、短径0.66m、深さ11cmを測る。長軸はN-55°-Eである。

21 土壌A-SK21 (挿図第35、挿図第42)

土壌A-SK21は、A区内の最南端に位置し、方形周溝墓A-SZ4の床面に所在する。土壌の南側は工事により削平されている。平面形は不整形である。規模は長径1.48m、短径0.54mである。長軸はN-19°-Eである。

22 土壌A-SK22 (挿図第35、挿図第40)

土壌A-SK22は、A区内の中央に位置し、方形周溝墓A-SZ2の内に所在する。重機による掘削で土壌の東側が欠損している。平面形は不整形で、現状での規模は、長径54cm、短径40cmである。長軸はN-87°-Wである。

第3節 方形周溝墓

A区内で検出した方形周溝墓(A-SZ)は5基である。方形周溝墓A-SZ1・A-SZ2・A-SZ4・A-SZ5の4基は欠損していた。A-SZ3の1基は完全な形で検出された。

1 方形周溝墓A-SZ1

(1) 遺構(挿図第36～38、巻頭図版第2、図版第2～5、図版第11の1)

方形周溝墓A-SZ1は、A区内の北側に位置している。北西側は、工事による土採りで欠損していた。現存する南東周溝、南西周溝、北西隅から1mほどの北西周溝には陸橋は認められない。南西周溝は8.80m、南東に残存する周溝は8.20mを測る。削平面からの周溝の幅は、上端で0.94～1.80m、下端で0.4～1.00m、深さ34～42cmを測る。断面は鍋底状を呈する。

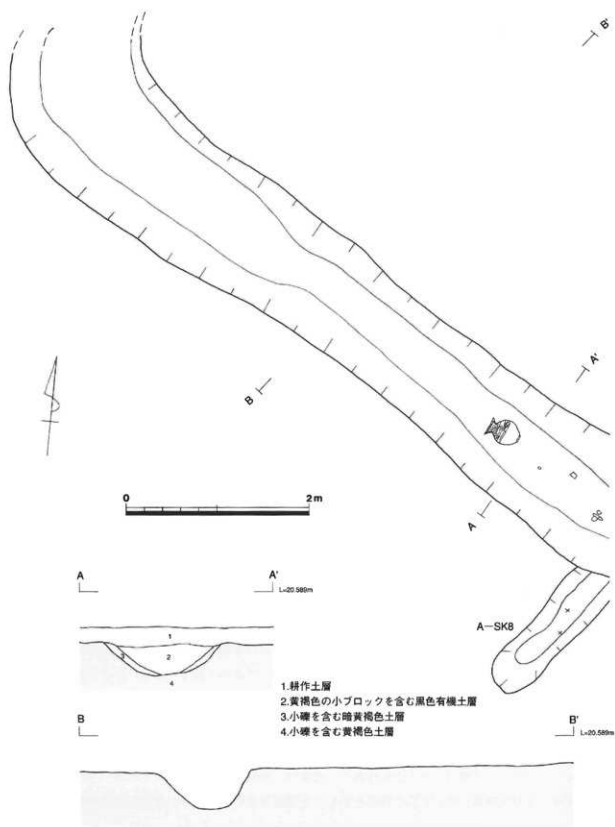
台状部は、東西に長軸をもつ、平面形が長方形をした浅い土壇が検出された。上端は、2.52m、下端は2.42m、短軸は南北で、上端で0.80m、下端で0.52mを測る。長軸の両端には径5～10cm大の円礫や角礫が南北に直線状に並んでいた。東端では石は16個、西端で13個確認できた。削平面からの土壇の深さは20～28cmである。土壇中央に径26cmの円礫が確認されたがそれは、地山直上ではなく厚さ4～10cmの茶褐色土層の上面から検出された。この土壇は1号方形周溝墓の主体部ではないかと考えられるもので、地山を掘り窪めてつくられている。

主体部は20～28cm程、地山を掘り窪めてつくられているが、埋葬遺体を覆い隠すためには、台状部の覆土は1m以上の厚さがあったものと考えられる。

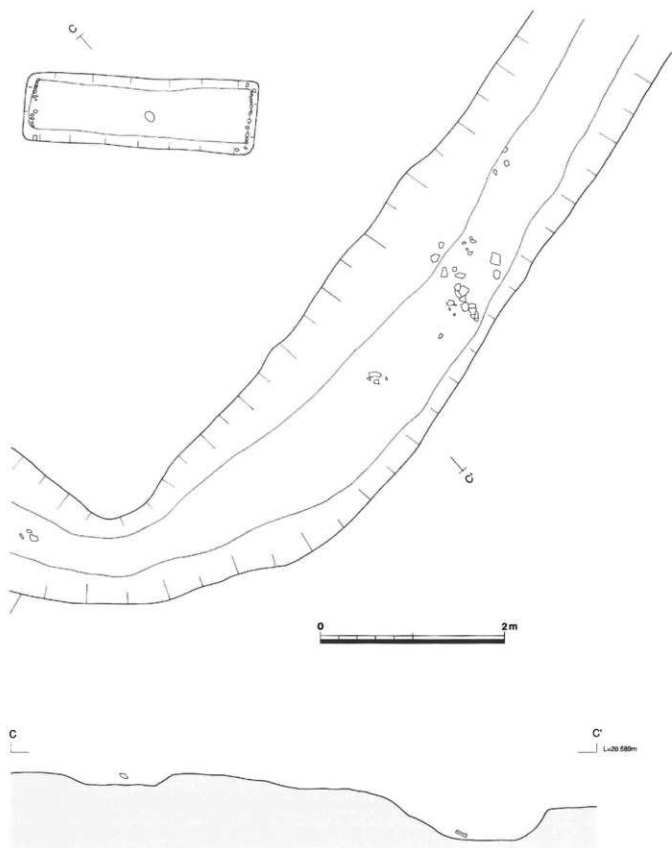
遺物は台状部より周溝内から多く検出された。周溝の南東コーナーから南西周溝では0.5～3mの範囲で、南東周溝では3～7mの範囲で多くの遺物が検出された。

(2) 遺物(挿図第45、挿図第46の41～44、図版第12の35～43)

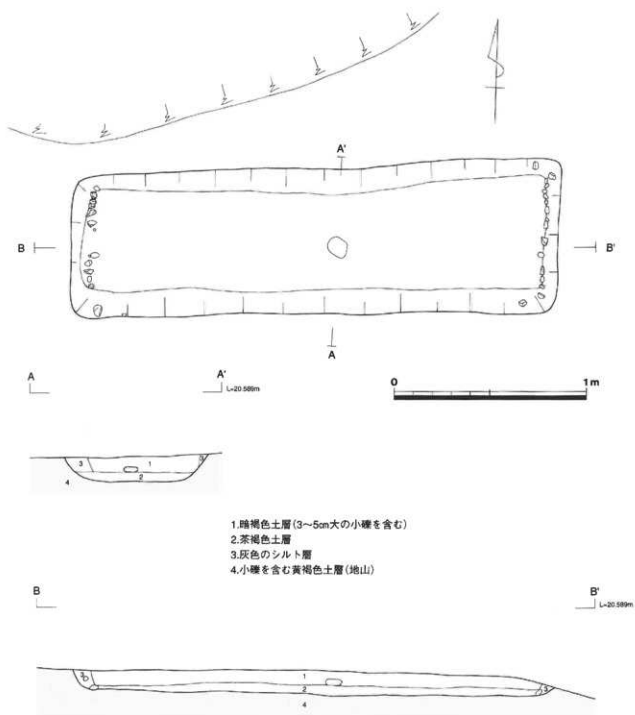
34は、溝の底面から検出したもので、直線的にハの字状に開く脚台部である。脚台端は角張って仕上げられている。35も溝の底面から検出したもので、くの字状に外反する口縁部をもつ平底の甕である。33は、A-SZ1の溝の黒色土層中から検出した甕の口縁部である。くの字状に外反する厚手の単口縁をもち、口縁部内外面は強いナデを行なっている。外面の上胴部には荒いハケメを施している。36は、溝の底面から検出した広口の壺である。口端を上下に拡張し、外面にクシ状器具により、押捺した羽状文帯をもち、内面には同器具による右下りの押捺文を中心として、上下に左下りの刺突文列を施し、羽状文帯を構成している。頸部はくの字状に屈折させている。上胴部には幅約3.3cmのクシ状器具による薄い文様帯が、上方から横線文、波線文、横線文の順に施されている。上胴部から底部の形状は、やや下胴部に重心をおく卵形を呈し、底部は平底である。また胴部のほぼ中央と底面に焼成後に外側からあけられた円孔が穿たれている。胴部中央の孔は直径3.0cmである。37は、溝の黒色土層中から検出したものである。壺の口縁部破片である。口端を面取りして角張り、この面にクシ状器具による横線を施している。内面にはクシ状器具による押捺で、羽状文を施している。38は、溝の



挿図第36 方形周溝墓A-SZ1実測図(1)



挿図第37 方形周溝墓A-SZ1 実測図 (2)



挿図第38 方形周溝墓A-SZ I 主体部実測図

底面から検出したもので、壺の口縁部破片である。単口縁で口端をナデ調整により丸味をもたせて仕上げている。39は、溝の底面から出土した壺の上胴部から底部にかけてのものである。内外面ともにハケメ調整で仕上げられている。また、底面には木ノ葉痕が残る。胴形は下胴部に重心をおき安定した形である。41は、溝内から検出した壺の頸部から底部にかけてのものである。輪積痕と指痕を残した粗製の壺である。底部は平底で、胴部の形状は上胴部に重心をおく卵形を呈している。42は、溝の黒色土層中から検出した、壺の頸部から上胴部破片である。43は、溝の底面から検出した下胴部の一部を欠いた広口の壺である。口端を上下に拡張し、外面にヘラ状器具による斜位のキザミを施している。胴部から底部に至る形状は、36と同じく、やや下胴部に重心をおく卵形を呈し、底面はナデにより凹みをつけている。

40は、溝の底面から検出した高坏である。脚部の下半部を欠いている。坏部が屈折し稜をもち直線的に口縁が開くものである。口端はナデ調整により丸味をもたせている。脚部の3ヶ所に透かし孔が穿れている。脚部の形は脚端にむかい外反するものと考えられる。

44は、溝の底面から検出した埴である。底部から直線的に立ち上り、そのまま口縁部に至る。口端はヨコナデにより、外反している。また内面には斜めの指痕が明確に認められる。

A-SZ1から検出した遺物の内、この地方の瓜郷上層第3様式(註8)の影響を受けた口縁部文様を施した36がある。壺の胴部形は瓜郷上層第2様式が丸味をおびているのに対して、本遺構の壺36、40、43は、やや下胴部で最大径をもつ卵形を呈している。また、高坏の40は坏部が直線的に大きく開き、埴の44も口縁部が直線的に立ち上がる。これらの傾向から本方形周溝墓は瓜郷上層第3様式の時期、すなわち古墳時代前期の王江式土器の前半時期に造営されたものと位置づけたい。

2 方形周溝墓A-SZ2

(1) 遺構(挿図第39~41、巻頭図版第3の1、図版第6~8・11)

方形周溝墓A-SZ2は、A区内の中央東側にあり、方形周溝墓A-SZ1の南南東に位置する。北側周溝の一部と東側周溝を欠損している。現状では、西側と南側の2箇所に陸橋部を有する。周溝を含む長さは、南北で9.74m、東西では残存する長さは、9.5mを測る。周溝の幅は、1.00~1.80m、深さは20~30cmを測る。断面は、浅井U字形をなしている。A-SZ1と比べて周溝が浅く、地山が削平されているため、主体部と思われる遺構は検出されなかった。

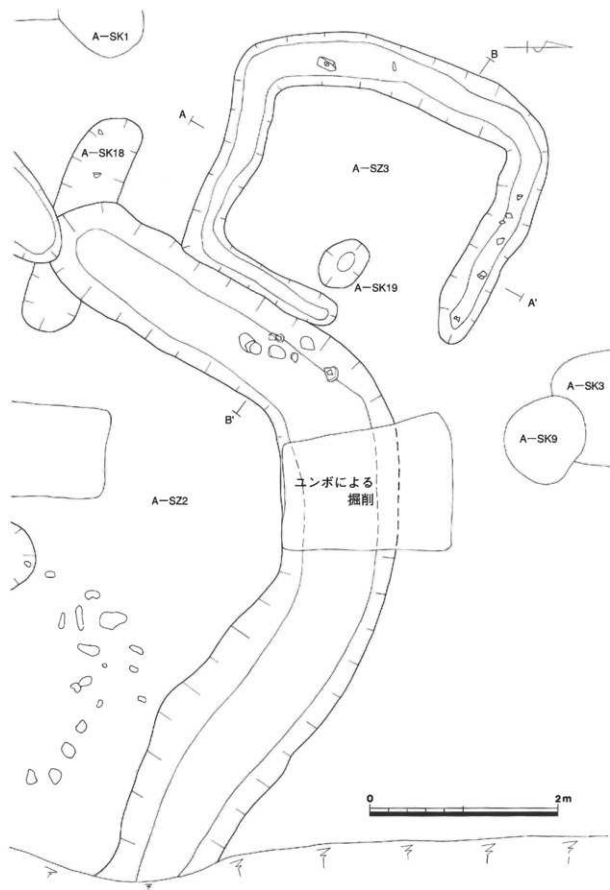
(2) 遺物(挿図第46の45~48、第47の49~52、図版第13の1~4)

45・46は、A-SZ2の溝の埋土から検出した壺の口縁部である。45は、口端がヨコナデ調整により面取りされている。46は、くの字状に外反する口縁部で、口端にヘラ状器具によるキザミが施されている。

47は、溝の底面から検出した脚付釜である。口縁が内彎し坏部に丸味をもたせている。脚部はやや膨らみをもち、丸味をもつ脚端に至る。脚部の3ヶ所に透かし孔をもち、クシ状器具による横線帯を巡らしている。

48は、溝の埋土中から検出した高坏の脚部であり坏部と脚端を欠いている。脚部の3ヶ所に透かし孔をもち、クシ状器具による横線帯を巡らしている。脚は八の字状に開いている。

49は、溝の底面から出土した単口縁の壺である。くの字状に外反する口縁部をもち、胴部は無文で、



挿図第40 方形周溝墓A-SZ2・A-SZ3実測図(2)

底部は平底である。器形は、ほぼ球形を呈している。50は、溝の底面から検出したものであり、壺の下脚部から底部にかけてのものである。底部は平底である。

51は、溝の底面から検出したものである。平底の碗で、底部からの立ち上りは丸味をおびている。

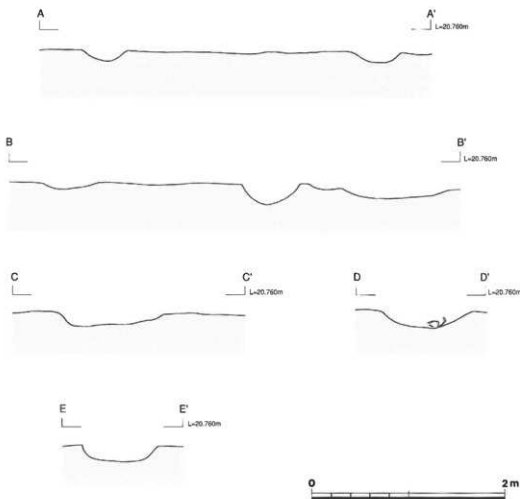
52は、溝の床面から検出した小形の磨製石斧で、石質は塩基性岩である。上半部は欠損しており、刃部は片刃である。

A-SZ2から検出した遺物は、瓜郷上層第2様式すなわち、欠山式土器の時期にあたる。片刃の石斧もこの時期の所産であろう。したがって本方形周溝墓は弥生時代後期後葉に造営されたものと考えられよう。

3 方形周溝墓A-SZ3

(1) 遺構(挿図第40、第41、巻頭図版第3の2、巻頭図版第11の1、図版第13の7)

方形周溝墓A-SZ3は、方形周溝墓A-SZ1の南側にあり、方形周溝墓A-SZ2の北側で周溝が接している。周溝を含む長軸は3.40m、短軸は、3.20mと小型である。長軸は東北東を示している。周溝の北東隅が切れて陸橋となっている。周溝の幅は30~50cm、深さは5~12cmで、断面はゆるやか



挿図第41 方形周溝墓A-SZ2・A-SZ3実測図(3)

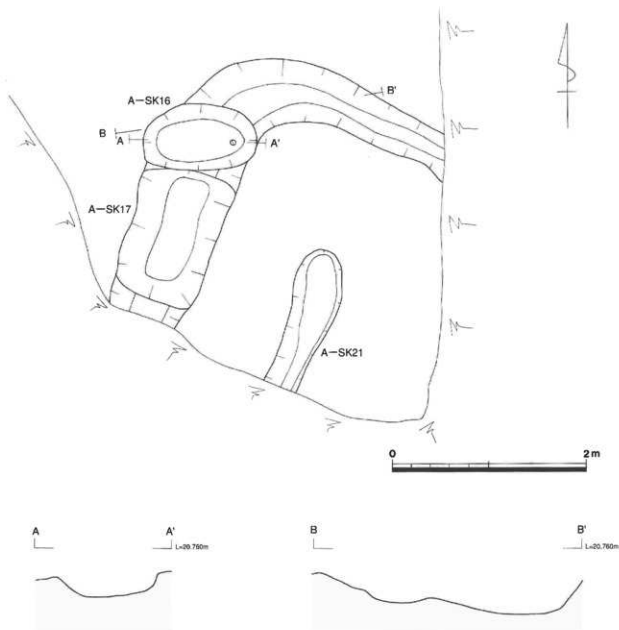
なU字形をしている。

台状部は西側周溝で2.50m、南側周溝で1.8mを測る。周溝を含めた西側の長さは3.4m、南側の長さは2.7mである。

主体部は検出されなかった。周溝の深さが12cmと浅いことから、地山がかなりの厚さで削平されたために主体部が検出されなかったものと考えられる。

(2) 遺物 (挿図第47の53～58)

53は、A-SZ3の溝の底面から検出した甕の破片である。くの字状に外反する口縁部をもつ。54も溝底面から出土した、台付甕の脚台部破片である。55は、溝の黒色土層中から検出した、壺の下胴部破片である。57は、同じく黒色土層中から検出した壺の口縁部破片である。口端が角張っている。

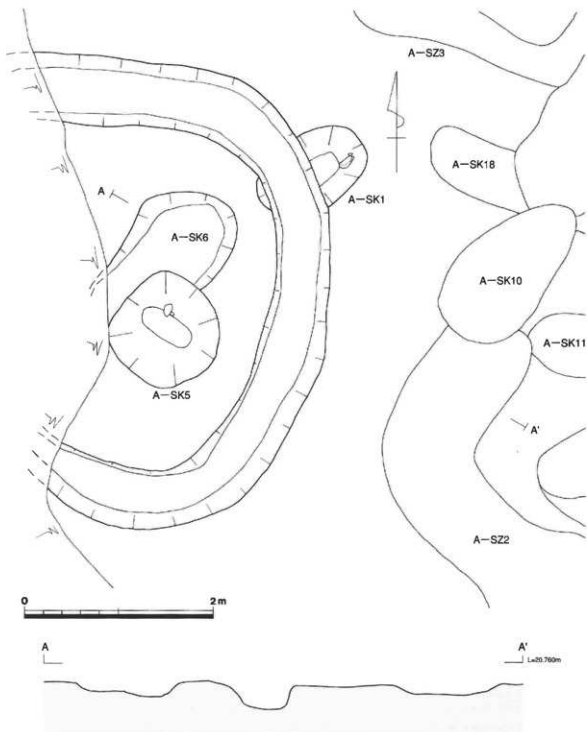


挿図第42 方形周溝墓A-SZ4実測図

56は、溝の底面から検出した高坏の坏部破片である。坏の接合部に低い稜をもち、丸みをもつ口端に至。丸味をもつて立ち上り、ややあまい稜をもつ。

58は、溝の底面から検出した埴または脚付埴の口縁部破片である。口縁部から口端にかけて丸味をもち内灣する。A-SZ2の47に類似する。

A-SZ2から検出した遺物の内、高坏56は寄道式土器であり、58は次山式土器の可能性がある。また、53・54の甕は古式土師器と考えられる。53・54は本方形周溝墓の時期を示すものと言えよう。



挿図第43 方形周溝墓A-SZ5実測図

4 方形周溝墓A-SZ4

(1) 遺構 (挿図第42)

方形周溝墓A-SZ4は、A区内の最も南にあり、堅穴住居址A-SB2の南に位置する。東側と南側の大半は、工事により削平されており、北側と西側の周溝の一部が現存するだけである。現状では、南北3.00m、東西3.50mを測る。周溝の幅は台状部の北西コーナーから東北東1mの地点で、48cm、南南西2.4mの地点で90cmを測る。北東周溝の幅に比べて南西周溝は幅が広い。周溝の深さは30~40cmで断面はゆるやかなU字形をしている。

(2) 遺物 (挿図第47の59)

59は、A-SZ4の溝の埋土中から検出した安山岩製の剥片である。側縁に使用痕が認められる。

5 方形周溝墓A-SZ5

(1) 遺構 (挿図第43)

方形周溝墓A-SZ5は、A区内の中央西側にあり、方形周溝墓A-SZ2の西に位置している。西側周溝と南側周溝の一部、北側周溝の一部が工事によりすでに削平されていた。また、土壌A-SK1を切り、土壌A-SK5とA-SK6により攪乱されていた。

周溝を含む南北の長さは、5.0m、東西の長さは現状では2.5mである。周溝の幅は55~70cm、深さは40~50cmである。周溝の断面は逆台形を呈している。

(2) 遺物 (挿図第47の60~62、図版第13の7)

60は、A-SZ5の溝の黒色土層中から検出した、深鉢の口縁部破片である。口端に指による指痕列が残る。61は、溝の黒色土層上面から検出したものである。須恵器の蓋坯の身である。

62は、溝の黒色土層上面から出土した流紋岩製の縦長の剥片である。両側縁に使用痕が認められる。60は、榎王式土器であり、61はこの地方の須恵器第4型式にあたる。

註1 P1 (32×24×-) の表記は(長径×短径×床面からの深さ)をcmの単位であらわしている。-は、数字が不明をあらわす。

註2 紅村 弘他『篠東第2次・榎王・行明調査報告書』『篠東』小坂井町教育委員会 1961

註3 久永春男『弥生式土器』『瓜郷』豊橋市教育委員会 1963

久永春男『東海地方(土器型式の推移と地域圏)』『新版考古学講座』雄山閣出版株式会社 1969

註4 久永春男・斎藤嘉彦『三河国における古墳出土須恵器の編年について』『岩津古墳群』岡崎市教育委員会 1964

久永春男・斎藤嘉彦『三河国における古墳出土須恵器の編年』『天神山古墳群』愛知県立岩津高等学校 1969

芳賀 陽『東三河における古墳出土須恵器の編年』『二本松古墳群』愛知県営岡田パイロット事業

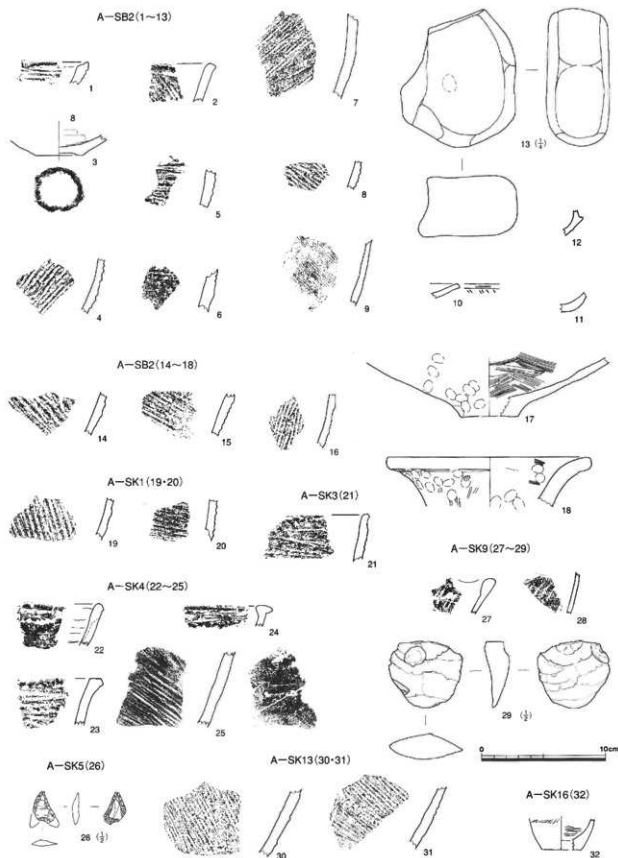
石巻地区埋蔵文化財調査用 1976

註5 例言の8の床面積の項を参照。

註6 杉原莊介・外山和夫『豊川下流域における縄文時代晩期の遺跡』考古学集刊3巻3号 1967

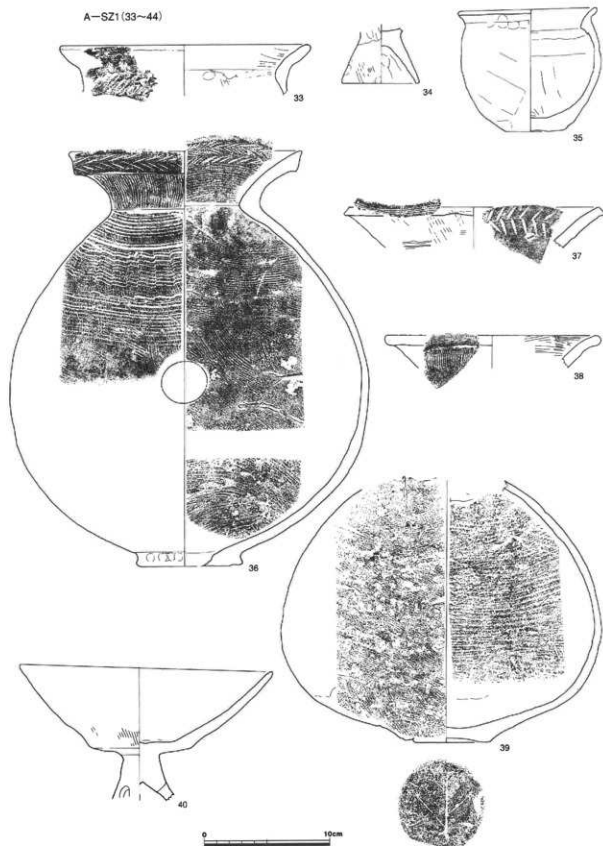
註7 久永春男『解説、三河の縄文式土器』『豊橋市民館郷土室資料日録』1953

註8 芳賀 陽『結語』『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第93選 瓜郷(Ⅱ)』豊橋市教育委員会 2007



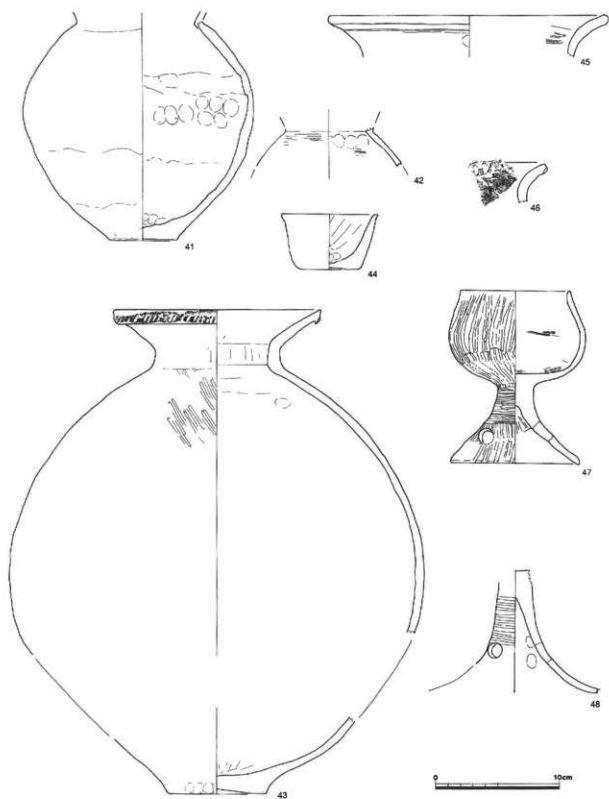
挿図第44 A区出土 遺物実測図1

(SB1・SB2・SK1・SK3・SK4・SK5・SK9・SK13・SK16)

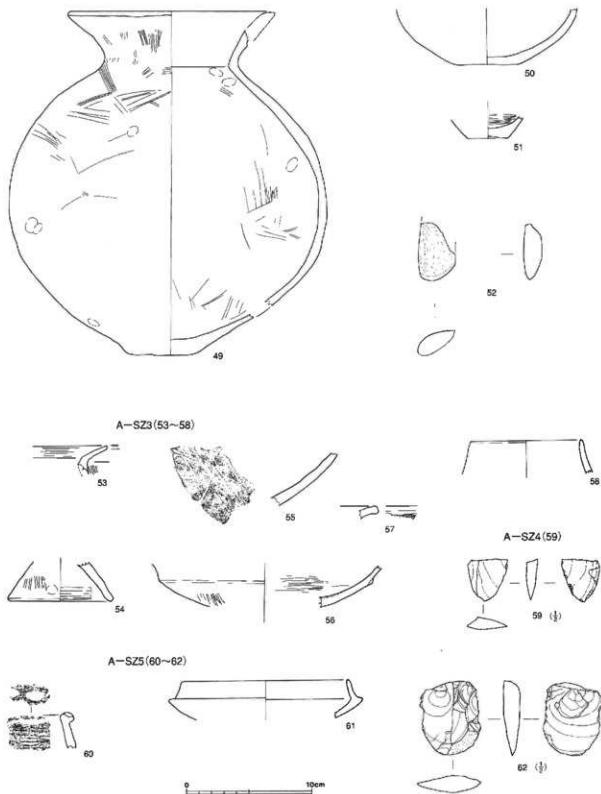


挿図第45 A区出土 遺物実測図2 (SZ1)

A-SZ2 (45~52)



挿図第46 A区出土 遺物実測図3 (SZ1・SZ2)



挿図第47 A区出土 遺物実測図4 (SZ2・SZ3・SZ4・SZ5)

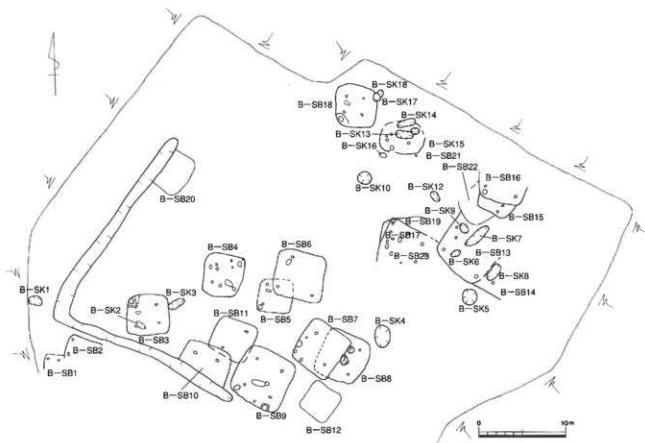
第4章 B区の調査

第2次調査のB区は、第1調査のA区の南に位置する。B区は標高約20mの台地上にあり、現状は畑地や草生地となっている。調査範囲は東西約50m、南北約70mに設定されたが、工事中のところもあり、実際の調査面積は、約2,000㎡で全体の57%であった。B区的地層は、主に耕作土層（表土層）と黒色有機土層と小礫を含む赤褐色土層（地山）の3層に大別される。このうち、耕作土層は重機によって削平した。そして、黒色有機土層の上面まで重機によって削平し、その後、人の力で発掘調査を進め、遺構を検出した。

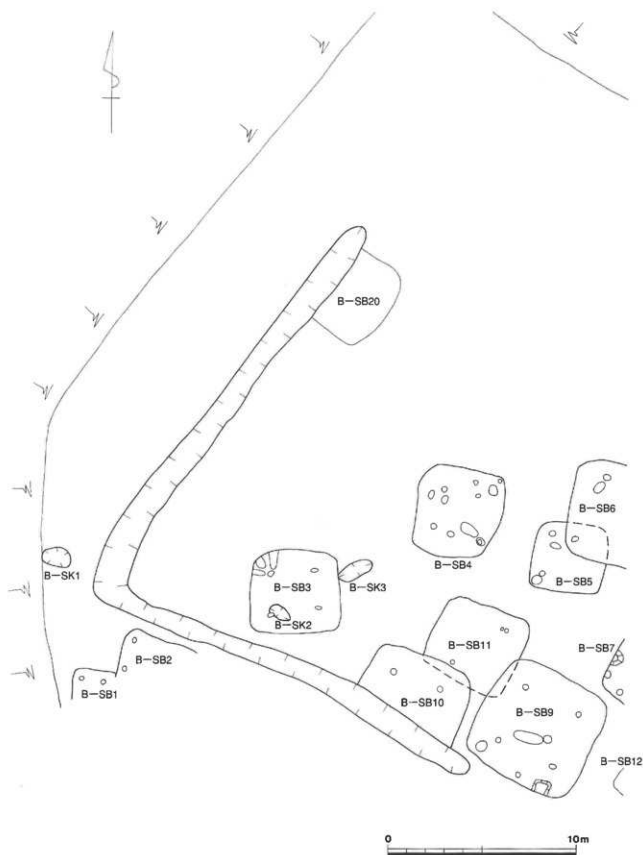
その結果、B区内からは、23軒の竪穴住居址（B-SB）と17基の土壌（B-SK）が検出された。

第1節 竪穴住居址

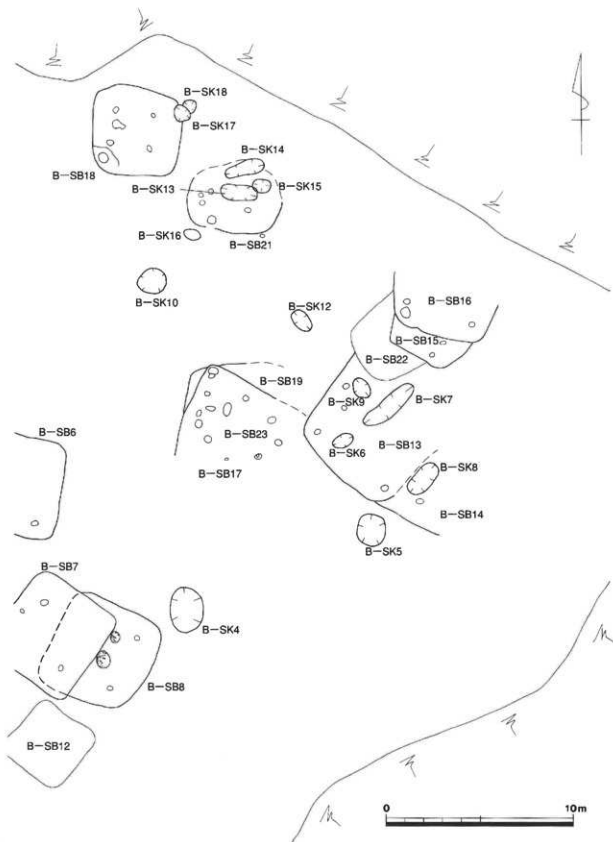
B区内から検出された竪穴住居址（B-SB）は、大きく南西群と北東群の2群に分けられる。南西群の竪穴住居址は、B-SB20の1軒を除くとB-SB1からB-SB12の12軒は、密集している。



挿図第48 B区全体における遺構の分布



挿図第49 B区における遺構の分布1



挿図第50 B区における遺構の分布2

北東群は、B-SB18とB-SB21の2軒は離れているが、B-SB13からB-SB17、B-SB19、B-SB22、B-SB23の8軒は密集している。

各堅穴住居址の主軸方位は、南西群の堅穴住居址はB-SB3とB-SB4の2軒が南向きで、B-SB1とB-SB2、B-SB5～B-SB12の10軒が南西向きである。北東群では、すべて南西向きである。

1、堅穴住居址B-SB1

(1) 遺構 (挿図第49、挿図第51)

堅穴住居址B-SB1は、B区内の南西隅に位置する。住居址の南壁と東壁、西壁の一部は工事により削平されており、北壁の一部は堅穴住居址B-SB2によって切られている。そのため、4分の1程度しか残存していない。削平面から床面までの深さは12cmである。残存する支柱穴は、P1(24×22×16)とP2(28×24×16)である。南西隅と南東隅の柱穴は削平されていて滅失していた。P1とP2の柱穴間の長さは1.32mである。壁溝は認められない。貯蔵穴と炉址は検出されなかった。堅穴住居址B-SB1は、B-SB2によって切られていることからB-SB1の方が古いと言える。

(2) 遺物 (挿図第66の1～7、図版第26の1)

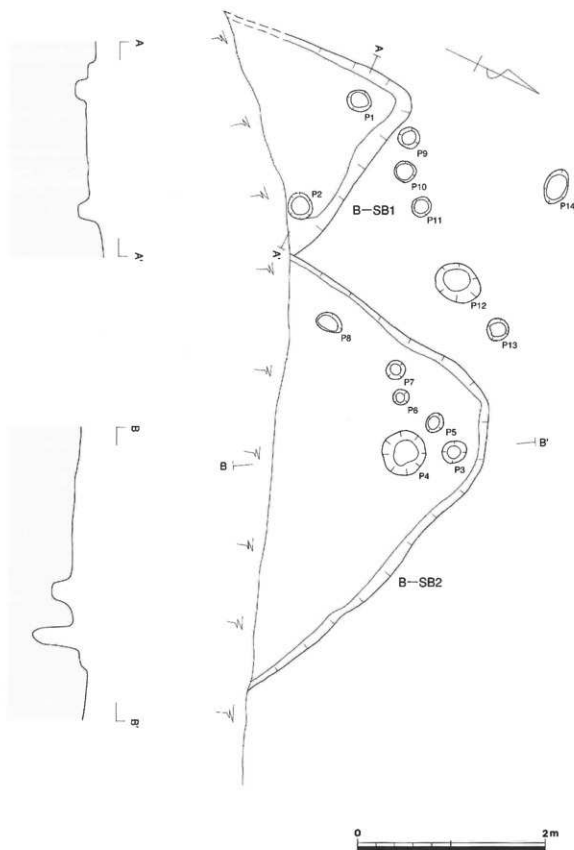
1～5・7は、B-SB1の床面から検出した古式土師器である。1は、S字甕の口縁部から胴上部の破片で、口縁部はヨコナデ調整され、肩部には斜位のハケメ調整後クシ状器具による平行線帯が施される。2は、S字甕の肩部破片で1と同じ調整が施されている。3は、壺の頸部または高杯の脚部と考えられるもので、ヘラ状器具による三角状の刺突文列が2条認められる。4は、壺の上胴部破片でクシ状器具による、浅く幅広の波線文、横線文、斜位の刺突文列が順に巡っている。5は、壺の口縁部破片である。7は、高杯の脚部で、外面にごく浅い横線文がめぐり、円形の透かし孔が2ヶ所に認められる。6は、堅穴の包含層から検出した壺の口縁部である。いわゆる「柳ヶ坪型壺」(註1)の文様である、クシ状器具の押捺で羽状文を口端面にもつ。内面にも同器具による羽状文を施している。

B-SB1の床面および包含層から出土した遺物はいずれも同時期のものと考えられる。この地方における瓜棚上層第3様式にあたる王江式土器(註2)の前半期としてよいであろう。

2、堅穴住居址B-SB2

(1) 遺構 (挿図第49、挿図第51)

堅穴住居址B-SB2は、B区内の南西隅に位置する。堅穴住居址B-SB1を切って東側につくられている。堅穴住居址B-SB2の南壁と東壁、西壁の一部、北壁の一部は、工事により削平されており、現存する床面は4分の1程度である。壁溝は認められない。柱穴は推定4個であるが、そのうちの1個の支柱穴P3で長径28cm、短径24cmで、床面からの深さは48cmと深い。P4は長径43cm、短径37cm、深さ19cmで底部は平らになっている。その点から貯蔵穴とも考えられる。炉址は検出することができなかった。P5(19×17×5)、P6(15×15×4)、P7(20×18×7)、P8(20×25×5)は、径20cm前後であり、床面からの深さは4～7cmである。この堅穴住居址に関連するものであれば添柱とも考えられる。炉址は検出されなかった。堅穴住居址B-SB2はB-SB1を切っていることか



挿図第51 竪穴住居址B-SB1、B-SB2実測図

ら、B-SB2の方が新しいと言える。

(2) 遺物 (挿図第66の8)

B-SB2から図示できないが土師器の細破片が出土している。8は、B-SB2埋土の黒色有機土層から検出した塩基性岩製の石棒片である。残存する長さは6.0cmで直径約3.3cmの円形を呈すると考えられる。

B-SB2からは、時期を特定する遺物は出土していない。しかし、B-SB1を切って堅穴が形成されており、細片ではあるが土師器も出土していることから、B-SB1より新しい堅穴と考えられる。また石棒に関しては、縄文時代の所産であろう。

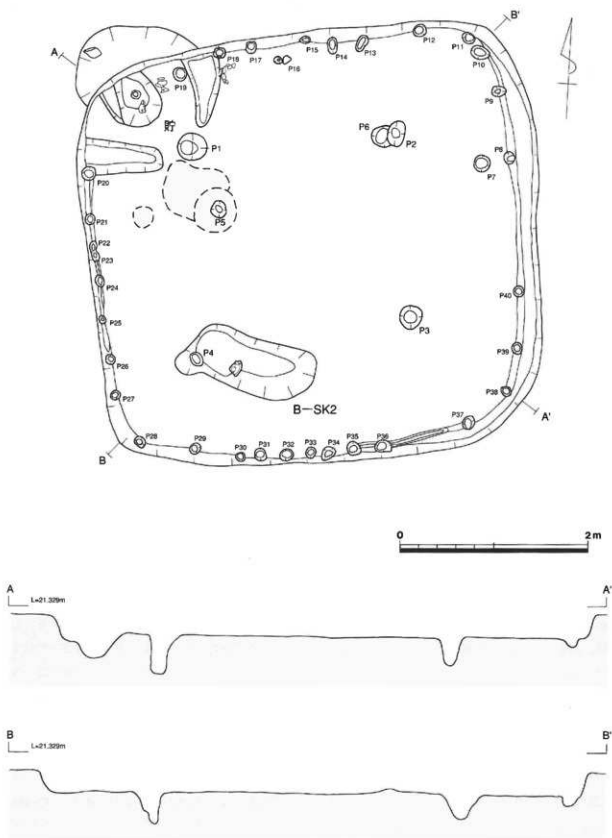
3、堅穴住居址B-SB3

(1) 遺構 (挿図第49、挿図第52、巻頭図版4の4、図版第14の2、図版第15)

堅穴住居址B-SB3は、B区内の南西寄りにあり、堅穴住居址B-SB2とB-SB4の間に位置している。堅穴住居址内には、長径1.35m、短径0.60m、深さ27cmで平面形は長楕円形、断面形が鍋底形をした土壇B-SK2に擾乱されている。それ以外は切り合いもなく完全な形で検出された。削平面から床面までの深さは24cmである。東壁には、幅20～30cmで深さ10cmの壁溝が南壁の一部まで巡っている。西壁は、貯蔵穴脇のマウンドから幅10cm、深さ6cmの壁溝が設けられている。主軸方位はN-5°-Wである。壁沿いには、径8～20cmで深さ6～15cmほどの小ピットがP8～P40の33個検出された。P8とP40は、東壁にあり1.30m離れている。入口に関する柱穴とも考えられる。東西壁は4.46m、南北壁は4.50m、面積は約20㎡である。主柱穴はP1(30×25×39)、P2(30×26×27)、P3(24×24×30)、P4(16×14×34)の4個で、柱穴間の長さは、P1～P2が2.26m、P2～P3が2.00m、P3～P4が2.32m、P4～P1が2.32mである。平面形は隅円方形である。加址は貯蔵穴近くに認められた。貯蔵穴は北西隅に設けられ、貯蔵穴をハの字に取り囲むように幅16～40cmで高さ5cmほどのマウンドが設けられていた。

(2) 遺物 (挿図第66の9～26、図版第35の5)

9は、B-SB3の包含層から検出した深鉢の口縁部破片である。口端上面に条痕が認められ、外面には口端部と下方にクシ状器具によるキザミを施しており、胴部には横位の条痕をつけている。13は、床面から検出した甕の脚台部である。脚台はハの字形に直線的に開き、脚台端部は角張って仕上げられている。10・11も包含層から検出したS字甕の破片である。10は口縁部で、肩部に斜位のハケメを施した後に横位の平行線帯を施している。11は、肩部で、横位のハケメの後、平行線帯を施している。12～15・17・18・20は、B-SB3の床面から検出した壺である。12は、頸部から上胴部の破片で、外面はハケメ調整が施され、肩部にクシ状器具による長い刺突文列が巡っている。14は、壺口縁部の破片である。直線的に立ち上がる頸部から、くの字状に開く口縁部をもち口端は角張っている。15は、壺の上胴部でクシ状器具による横線文の間に、同器具による羽状の刺突文列が施されている。16は、包含層から検出した壺の上胴部破片である。外面にクシ状器具による横線文が認められる。17は、壺の上胴部でクシ状器具による薄い横線文の間に、同器具による刺突文列を2段加えている。18は、壺の底部破片である。20は、床面から検出した小形丸底甕で口縁部を欠く。19は、堅穴の東北ピ



挿図第52 竪穴住居址B-SB 3 実測図

ット内から検出した壺の底部破片である。22は、床面から検出した高坏の坏部破片である。坏部の造りに丸味があり、脚部との接合部はソケット状に飛び出ている。21は、床面から検出した小形器台または、小形高坏と考えられるものである。脚部は脚端にむかい外反して、3ヶ所に円形の透かし孔をもつ。坏部は丸味をもたせている。23は、竪穴北東のピット内、24は、床面から検出した碗である。いずれも小形で、口径に対して約2/3の広い底部をもち、体部にややふくら味をもたせている。25は、B-SB3内のB-SK2から出土した鉢である。体部が浅く、口唇に稜をもち口縁部が大きく開く。26は、床面から検出した直立する口縁部をもつ鉢で、体部にやや荒いハケメを施す。口縁部がやや内彎する形態をなすものと考えられる。

B-SB3から出土した遺物で、9は、竪穴内に混入したのと考えられ、条痕系土器の檜王式土器に比定されるものである。B-SB3の時期を示すものとして、床面から出土した遺物から王江式土器の時期と考えられる。

4、竪穴住居址B-SB4

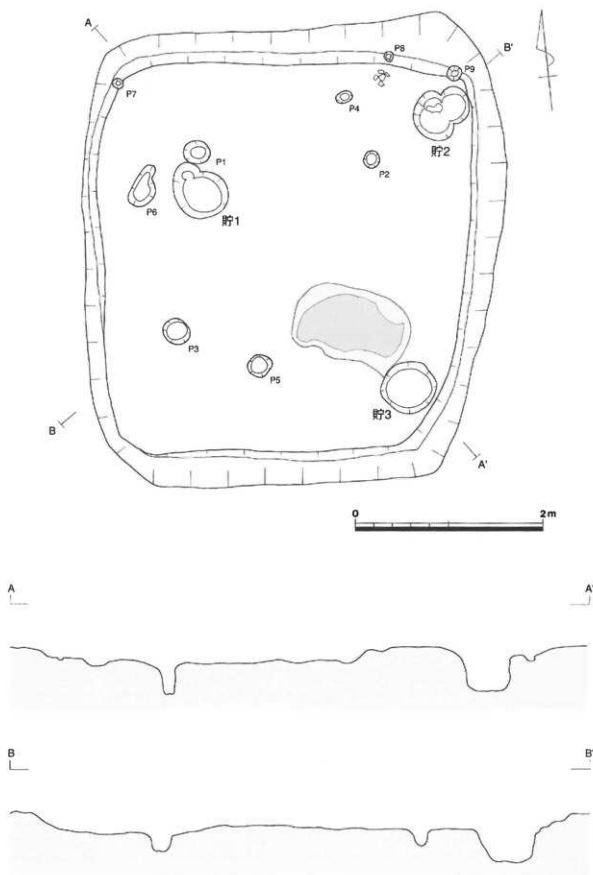
(1) 遺構 (挿図第49、挿図第53、巻頭図版第4の3、図版第16の1)

竪穴住居址B-SB4は、B区内の南西にあたり、竪穴住居址B-SB3とB-SB5の間に位置する。削平面から床面までの深さは14~20cmである。壁溝は、西壁の一部を除いて認められる。東西壁は4.06m、南北壁は4.42m、面積約17㎡である。平面形は隅円長方形である。主軸方位はN-10°-Eである。主柱穴は推定4個であるが、P1(30×25×38)、P2(20×20×19)、P3(26×27×22)の3個検出された。柱穴間の長さはP1~P2は1.86m、P3~P1は2.00mである。炉址は1箇所、南東寄りにある。長軸1.28m、短軸0.80mの範囲が焼けしまり、炭化物も見られた。貯蔵穴は、3箇所認められた。貯蔵穴1は北西寄りにあり、規模は長径66cm、短径55cm、深さ30cm、貯蔵穴2は北東隅にあり長径65cm、短径50cm、深さ38cm、貯蔵穴3は南東隅にあり、長径60cm、短径53cm、深さ38cmである。

(2) 遺物 (挿図第67の27・28・30~37、図版第27の1~4)

33は、B-SB4の埋土中から検出した壺の口縁部破片である。口端に二枚貝によるキザミを施している。口縁部外面には条痕が認められる。27は、床面から検出された台付甕である。口縁部と下胴部から脚台部にかけての残存する。口縁部は、くの字状でやや受口状を呈している。30は、同じく床面から出土した、くの字状口縁をもつ甕の口縁部から上胴部にかけての破片である。立ちが高く、反り気味に開く口縁をもつ。28・31は、ともに床面から検出した台付甕の脚台部である。28は、脚台端に向かいハの字状に開く脚台部をもつ。31は、指痕の残る荒い造りで、脚台部は低く、ハの字に開き、脚台部は角張っている。32は、床面の炉址付近から検出したものである。小形甕の上胴部から底部にかけてのものである。甕の重心を下胴部におく造りである。34・35は、床面から検出した壺の底部である。34は、平底で床面に木の葉痕が認められる。35は、平底で底面に凹みをもつものである。36は、床面から検出した碗である。平底の底径は口径の1/2である。胴部は丸味をもち、口端部に向かいやや内彎している。口端部はヨコナデ、外面の全てにハケメ調整痕が残る。37は、床面検出の鉢である。底部は平底で、膨らみのある胴部から、くの字状に大きく外反する口縁部をもつ。

B-SB4の埋土から出土した、33は、弥生中期初頭の続水神平式土器にあたる。その他の床面か



挿図第53 竪穴住居址B-SB4実測図

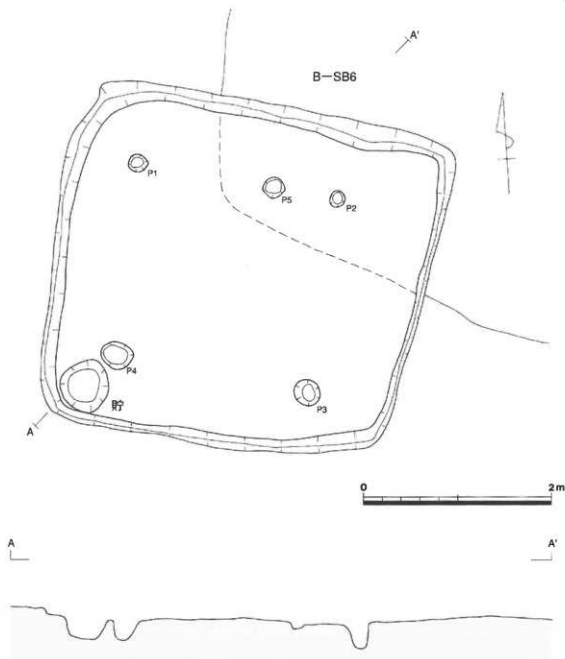
ら出土した遺物のうち、壺の32については、胎土および、胴部の腰に重心をおくことなどから、遠江地方の搬入品であろう。

B-SB4の時期は瓜郷上層第3様式、王江式土器の前半期に営まれたものとする。

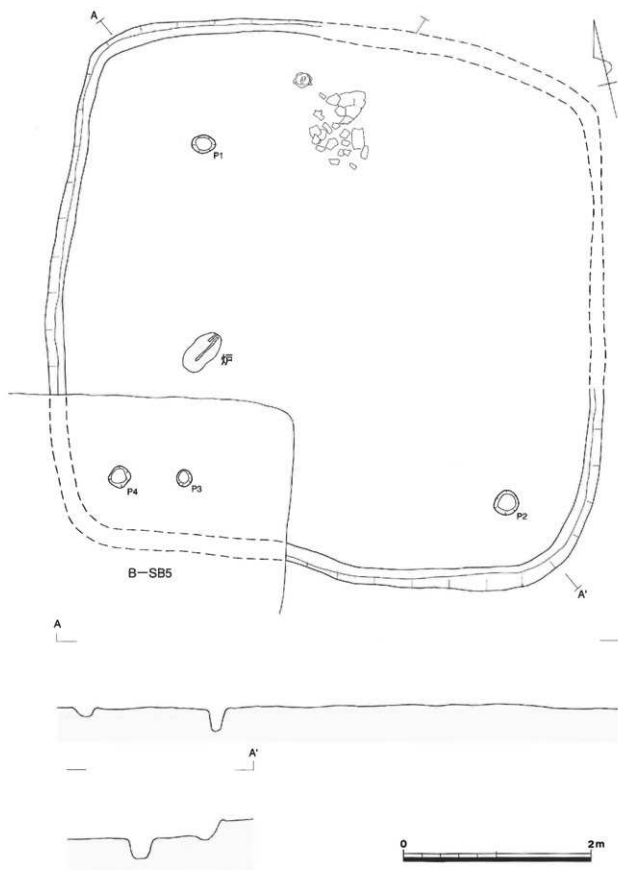
5、竪穴住居址B-SB5

(1) 遺構 (挿図第49、挿図第54、図版第16の2、図版第17、図版第18の1、図版第25の1)

竪穴住居址B-SB5は、B区内中央にあり、竪穴住居址B-SB4の2m東に位置している。竪穴住居址B-SB6と切り合っている。削平面から床面までの深さは、10cm、壁溝は全周を巡っている。東西壁は3.82m、南北壁は3.62m、面積約13㎡である。平面形は長方形である。主軸方位はN



挿図第54 竪穴住居址B-SB5 実測図



挿図第55 竪穴住居址B-SB5実測図

- 7° - Eである。柱穴はP1 (20×22×25)、P2 (18×16×25)、P3 (28×31×25)、P4 (35×35×24)の4個で、柱穴間の長さは、P1~P2が2.20m、P2~P3が2.18m、P3~P4が2.14m、P4~P1が2.14mを測る。炉址は検出されなかった。貯蔵穴は南西隅にあり、長径は56cm、短径は50cm、深さは21cmを測る。B-SB5はB-SB6を切って構築されていることから、本堅穴の方が新しいと言える。

(2) 遺物 (挿図第67の38・39、挿図第68の41)

38・39は、B-SB5の床面近くの埋土中から検出した。いずれも、条痕系の深鉢の胴部破片である。外面には乱雑な浅い条痕を施している。41は、貯蔵穴から検出した壺の口縁部破片である。口端にヨコナデ調整による一条の沈線をもつ。他に、壺または高坏と考えられる土師器の破片(1cm~2cm大)が検出されているが部位等不明のため図示できなかった。

B-SB5から検出した条痕文系土器38・39は、本堅穴の時期を反映したものではない。B-SB6を切って形成されていることや小片だが土師器が床面から検出されている点から、B-SB6が廃棄された後に営まれた堅穴住居址である。

6、堅穴住居址B-SB6

(1) 遺構 (挿図第49、挿図第50、挿図第55、図版第16の2、図版第17、図版第18の1)

堅穴住居址B-SB6は、B区内の中央部に位置し、堅穴住居址B-SB5と切り合っている。南西部は、堅穴住居址B-SB5で切られ、北東隅は、工事によって削平されている。削平面から床面までの深さは、16cmである。東西壁は5.60m、南北壁は5.50m、面積は約30㎡である。壁溝は、南東隅と北西隅に認められる。主軸方位はN-11°-Eである。柱穴は推定4個であるがそのうちP1 (22×22×22)、P2 (33×32×19)、P3 (18×16×23)の3個検出された。柱穴間の長さは、P2~P3が3.50m、P3~P1が3.64mである。平面形は、隅門長方形である。炉址は、南西寄りに1箇所認められた。貯蔵穴は検出されなかった。

(2) 遺物 (挿図第67の40、挿図第68の42~50、図版第27の5、図版第35の1)

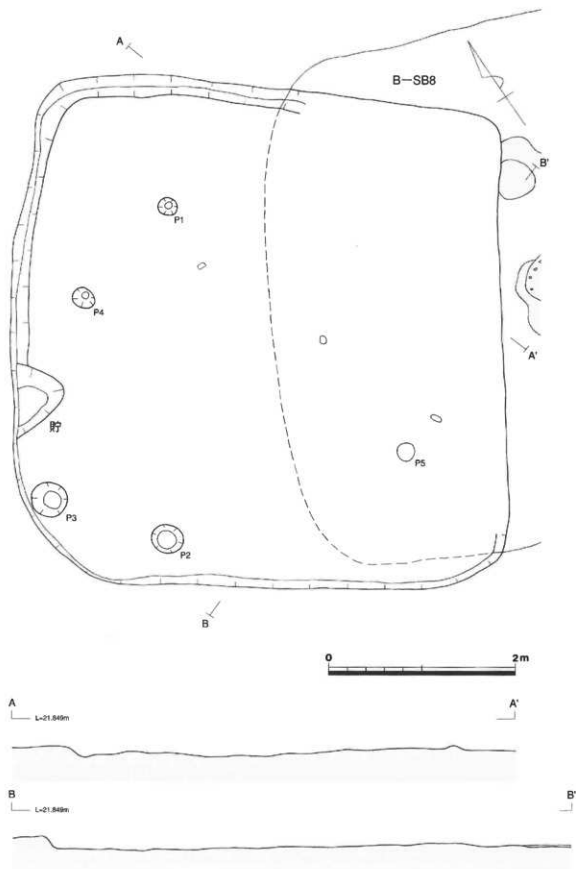
40は、B-SB6の床面から検出したS字甕の口縁部から上胴部の破片である。口縁部は段をもち上方に拡張し、やや開き気味である。上胴部には斜位のハケメ調整の後に、クシ状器具による横の平行線帯を施している。42~46は、床面から検出した壺である。42は、口縁部破片でハの字状に開いた頸部に丸味をおびた口端がつく。43は平底の底部である。45・46は、底面に凹みをもつ底部である。44は、口縁部を欠く壺である。胴部は球形をなしており、底部の底面には凹みをもつ。外面はハケメ調整後、ナデ調整を施し、内面には指痕が残る。

47は、床面から検出した硬砂岩製の敲石である。四方の側面と上面の5ヶ所に敲打痕を残す。

48・49・50は、鉄製品である。48・49は埋土中から検出されたが、錆化がすすみ器種は不明である。50は、床面から検出されている。鉄鍔の中茎と思われる。

B-SB6の床面から検出したS字甕の40および壺の42・44は、王江式土器の時期と考えられる。また、床面から出土した敲石の47および鉄製品の55は、本堅穴の所産と考えられる。

本B-SB6は、B-SB5に切られていることからB-SB5より古い堅穴住居址と言える。



挿図第56 竪穴住居址B-SB7 実測図

7、堅穴住居址B-SB7

(1) 遺構(挿図第49、挿図第50、挿図第56、図版第16の2、図版第18、図版第20の2)

堅穴住居址B-SB7は、B区内の中央南に位置し、堅穴住居址B-SB8を切っている。削平面から床面までの深さは16cmである。平面形は隅円方形である。東西壁は5.20m、南北壁は5.20m、面積約26㎡である。壁溝は北東壁と北西壁に認められる。主軸方位はN-32°-Eである。柱穴は推定4個であるが、検出されたのはP1(24×20×15)とP2(30×30×21)であり、南東側では柱穴を認めることができなかった。貯蔵穴は北西壁にあり、平面形はおにぎり形で、長径80cm、短径54cmである。炉址は検出されなかった。

(2) 遺物(挿図第48の51~55)

52・53・55は、B-SB7の埋土中から検出した。52は、壺の上胴部から頸部にうつる部分の破片である。肩部には、太いクシ状器具による横線が3条認められる。53は、壺の頸部で下端に薄いクシ状器具による横線が4条認められる。55は、壺または鉢の口縁部近くの破片と思われる。クシ状器具による簾状文の下に斜位の縄文(LR)を施している。51・54は、B-SB7の床面から検出したものである。51は、壺の口頸部破片で、くの字状に折れた頸部から大きく外反する口縁部をもつ。口端はナデにより角張り、内面は平坦面をなし、この面にクシ状器具による波線文が施されている。54は、壺の上胴部破片である。クシ状器具による横線文の間に同器具による左下りの刺突文列を施している。

52・53・55は、この地方における弥生時代中期後葉の長床式土器である。48・51は、B-SB7の築営の時期を示すもので、B-SB1と同時期に営まれたものと考え。前記の弥生土器(52・53・55)は、本堅穴が切るB-SB8に属するものと考え。

8、堅穴住居址B-SB8

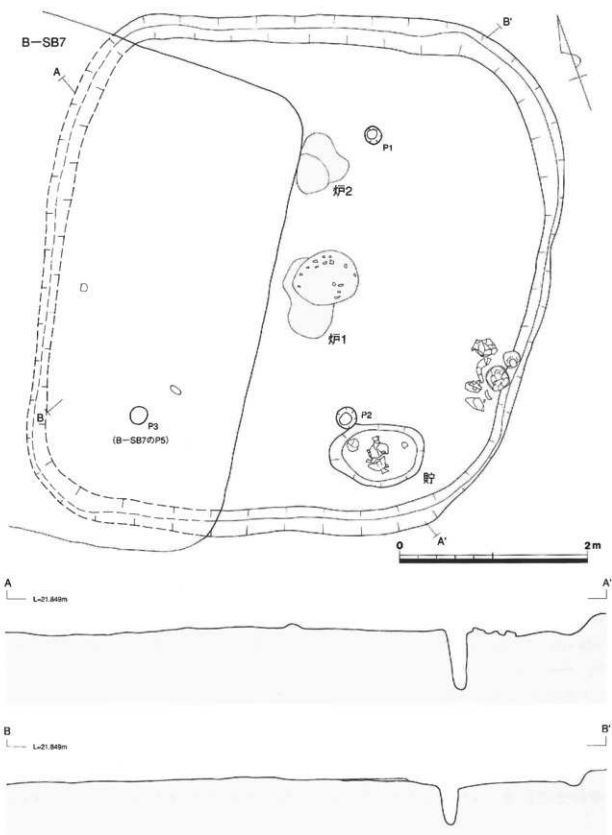
(1) 遺構(挿図第50、挿図第57、図版第18の2、図版第19の1、図版第20の1)

堅穴住居址B-SB8は、B区内の中央南に位置し、堅穴住居址B-SB7に切られており、北西壁は工事により削平されていた。削平面から床面までの深さは8~18cmである。床面は東西の長さ5.00m、南北の長さ5.00m、面積は約25㎡である。壁溝はB-SB7に切られている壁を除いてすべて巡っている。平面形は隅円方形である。主軸方位はN-25°-Eである。柱穴は推定4個であるが、P1(20×20×40)、P2(20×20×60)、P3(20×20×-)の3個検出された。柱穴間の長さはP1~P2が3.10m、P2~P3が2.26mである。

炉址は床面中央部と中央から北東壁寄りの2箇所に認められた。貯蔵穴は、南壁角に認められ、平面形は楕円形、断面形は平底形である。規模は長径1.05m、短径0.7m、深さ60cmである。

(2) 遺物(挿図第68の56~60、挿図第69の61~67、図版第27の6、図版第28の1~4)

56~63は全てB-SB8の床面から検出した甕である。56は小形の台付甕で、脚台部の約1/3が中実で脚端近くで膨らみをもつ。胴部の形状は上胴部に最大径をおく無花果形を成している。口頸部はくの字状に折れて、口端は丸味をもつ。口端には棒状器具による浅いキザミが施されている。57~59は、甕の口縁部破片で、口端に棒状器具によるキザミ痕が認められる。60は、口縁部から上胴部、62は、口縁部から下胴部までの甕である。いずれも、口端に棒状器具によるキザミを巡らせている。胴部の



挿図第57 竪穴住居址B-SB 8 実測図

形状は無花果形で下方には脚部の付く台付甕と考えられる。61は、甕の口縁部破片であり、口端に巻貝の腹を刺突したキザミ痕を残す。63は、口縁部から下胴部まで残る甕で、下胴部下端の広がりから脚台が付く台付甕である。口縁部をくの字状にまげ、口端をナデ調整により角張らせキザミは施していない。体部の上胴部外面には縦位の粗いハケメが、下胴部には斜位のハケメが認められる。胴部の形状は無花果形を呈している。64～67は、全てB-SB8の床面から検出した壺である。65は、反りをもって開く口縁部で、口端にヘラ状器具によるキザミを施している。65は、広口の壺の頸部から口縁部の破片で、口端を欠く。頸部の下方から、クシ状器具による横線文、簾状文風の刺突文、やや乱れた波状文を施している。66・67は、同一個体である。壺の上胴部破片で、頸部にうつる部分に2条一組の双子線が間隔をおき3段認められる。2段目と3段目の双子線の間には斜格文が施されている。本B-SB8から出土した土器は、弥生時代中期後葉の長床式土器である。

9、竪穴住居址B-SB9

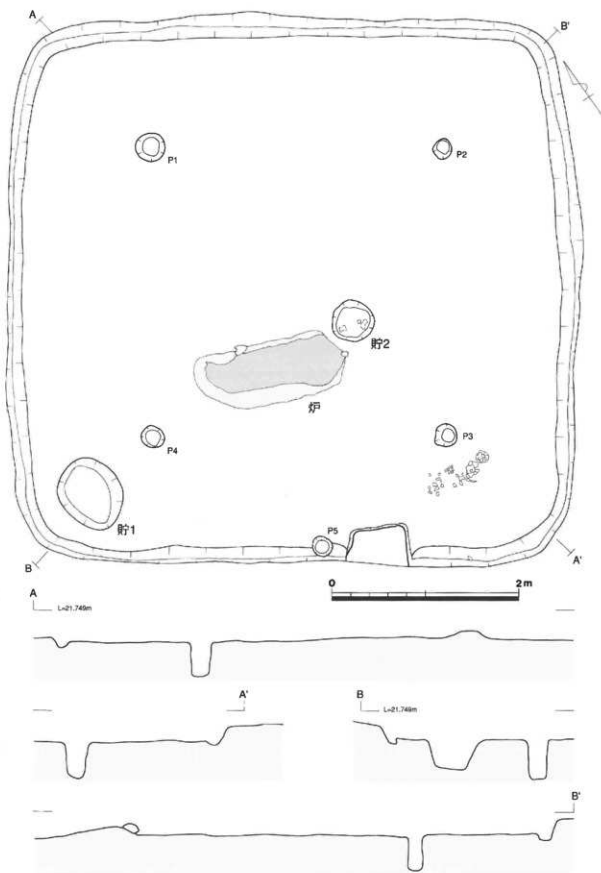
(1) 遺構 (挿図第49、挿図第58、図版第18の1、図版第19、図版第20の2、図版第21の1)

竪穴住居址B-SB9は、B区内中央南に位置している。遺存状態は良好で、削平面から床面までの深さは、16～24cmである。壁溝は、南西壁の南コーナーから1.3～3mの範囲を除いてすべて巡っている。床面は東西の長さ5.78m、南北の長さ5.56m、面積は約32㎡である。平面形は隅円方形である。主軸方位はN-38°-Eである。柱穴はP1(30×32×37)、P2(22×22×37)、P3(26×25×38)、P4(24×24×39)の4個である。柱穴間の長さは、P1～P2が3.16m、P2～P3が3.18m、P3～P4が3.18m、P4～P1が3.18mである。炬炬は中央に1箇所認められた。炭化物や灰の範囲を含めて、長軸1.62m、短軸0.72mである。貯蔵穴は2箇所ある。貯蔵穴の1は西の隅にあり、平面形は楕円形で、断面形は鍋底形をしている。規模は長径83cm、短径66cm、深さ37cmである。貯蔵穴2は中央部にあり、ほぼ円形で長径44cm、短径42cmである。南西壁に壁面を利用してつくられた高さ10cmほどの土盛りが検出された。入口の階段であろうか。

(2) 遺物 (挿図第69の68～70・72～75、図版第28の5・6、図版第29の1・2)

69は、B-SB9の埋土中から検出した壺の上胴部破片である。3条一組のクシ状器具による横線文を二段重ねている。68は、床面から出土した小形の台付甕である。口縁部は長く胴径より広い。くの字状口縁は強く開き口端は丸味をもたせている。胴部は丸く脚台部に至る。脚台部は丈が低く、直線的にハの字状に開き、脚台端は丸味をもつ。70は、床面から検出した壺の口縁部から上胴部で、器壁は薄く明確に折れるくの字状の口縁部をもつ。口端は内面に折り曲げ平坦面をつくる。上部には、斜位のハケメ調整の後にクシ状器具による薄い横線文が残る。73は、床面から検出した高坏の坏部である、この坏部は皿状に拡がり丈は低い。口端は丸く仕上げられている。74は、床面から検出した埴である。丸味をおびた体部をもち、口端は丸く仕上げられている。底面は、強いナデにより上げ底状の凹みをもつ。72は、床面から検出された壺で器壁は薄く、胴長で丸底の底部から2/3立ち上がった所に、直立する口縁部をもつ。内面には、輪積痕を残す。75は、埋土中から検出した、製塩土器の棒状脚部である。

本B-SB9の埋土中から出土した、69は、SB-8と同時期の長床式土器の壺と考えられる。75



挿図第58 竪穴住居址B-SB9実測図

は、6世紀後半から7世紀前半にかけての製塩土器（註3）である。床面から検出したその他の遺物は、口縁の広い小形の台付甕の68、丈が低く、口縁が広がる高坏の73、壺70は、畿内地方の様相をもつものである。本竪穴は、青山式土器（註4）の時期と考えられる。

10、竪穴住居址B-SB10

（1）遺構（挿図第49、図版第19の1）

竪穴住居址B-SB10は、B区内の南端に位置し、竪穴住居址B-SB9の西にある。南半分は工事により削平されている。削平面から床面までの深さは30cmである。現状からは、北壁の東西幅は5.10m、北壁より2m南では6.10mを測る。従って、東壁と西壁は中央にいくにしたがい翹ぶくれをしている。北壁は直線状であるが、南壁は欠損しているため、南北壁の長さは不明である。平面形は隅円方形か隅円長方形であろう。主軸方位はN-19°-Eである。柱穴は推定4個であるが、P1（12×12×26）、P2（18×15×28）の2個が検出された。柱穴間の長さは、2.80mである。炉址は、P1とP2の柱穴の間にあり、焼土や灰、炭化物が認められた。貯蔵穴は検出されなかった。

（2）遺物（挿図第70の76・77・78）

76・77は、いずれもB-SB10の床面から検出した壺である。76の口縁部は朝顔形にひらき、口端は丸く仕上げられている。77は、平底をなす底部破片である。上胴部へは直線的に立上る。78は、安山岩製の凹基無茎鐵である。

B-SB10から時期を特定する遺物は検出しなかったが、壺76の胎土や調整からB-SB9と同時期または相前後する時期と考える。石鐵の78については調査区内に散布する条痕系土器、または弥生式土器に伴うものと考えられる。

11、竪穴住居址B-SB11

（1）遺構（挿図第49、図版第19の1）

竪穴住居址B-SB11は、B区内の中央南に位置する。竪穴住居址B-SB10の北壁に切られ、さらに竪穴住居址B-SB9の西壁に切られている。竪穴住居址B-SB11の実測図は、百分の1の実測図しかないので、メモに残された資料を手掛かりとしてまとめた。床面は東西の長さ、南北の長さともに4.70m、面積は約22㎡である。平面形は隅円方形である。主軸方位はN-22°-Eである。柱穴は推定4個であるが、北東角の1個のみ検出された。炉址は、床面中央よりやや南側で1箇所検出された。貯蔵穴は検出されなかった。

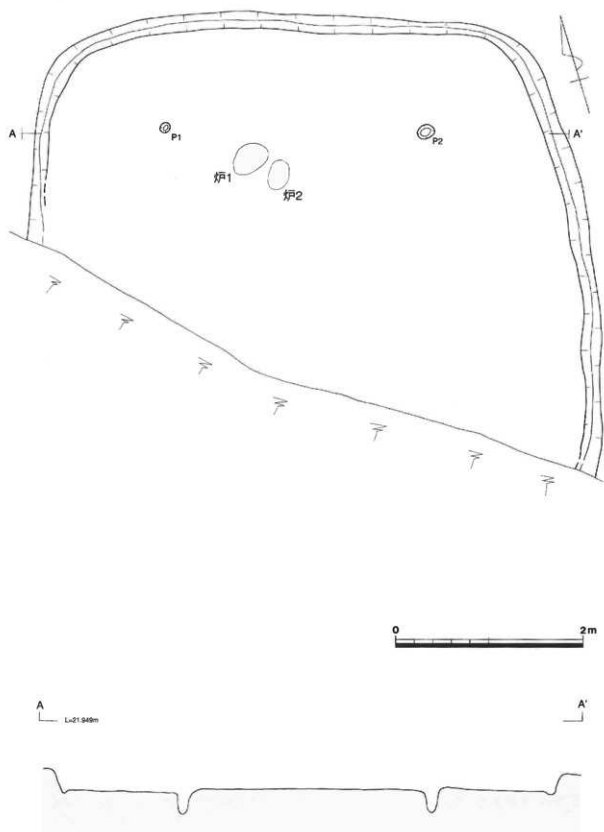
（2）遺物

B-SB11からは遺物は検出されなかった。

12、竪穴住居址B-SB12

（1）遺構（挿図第50）

竪穴住居址B-SB12は、竪穴住居址B-SB8の南側で、竪穴住居址B-SB9の西側に所在する。東西壁、南北壁ともに4.00mである。削平面から床面までの深さは、7cmから10cmである。壁面



挿図第59 竪穴住居址B-SB10実測図

は地山を掘り窪めて構築されているが、壁溝は認められなかった。炉址も貯蔵穴も検出されなかった。

(2) 遺物 (挿図第70の79~81)

79・80は、B-SB12の床面から検出された。79は、甕の口縁部破片で、器壁は厚く外面はハケメ調整を施し、口端はヨコナデ調整で丸味をもたせている。80は、二重口縁をもつ壺の口縁部破片で、頸部から直角に曲がり、段をなしやや拡がり気味に開口する。口端は丸味をもたせている。81は、マイクロコアである。打面に打面調整痕を残し、マイクロブレード抽出の剥離痕が残る。

B-SB12から検出された遺物は、SB-10と同時期の青山式土器の時期と考えられる。なお、マイクロコアは、後期旧石器時代末葉の所産であろう。

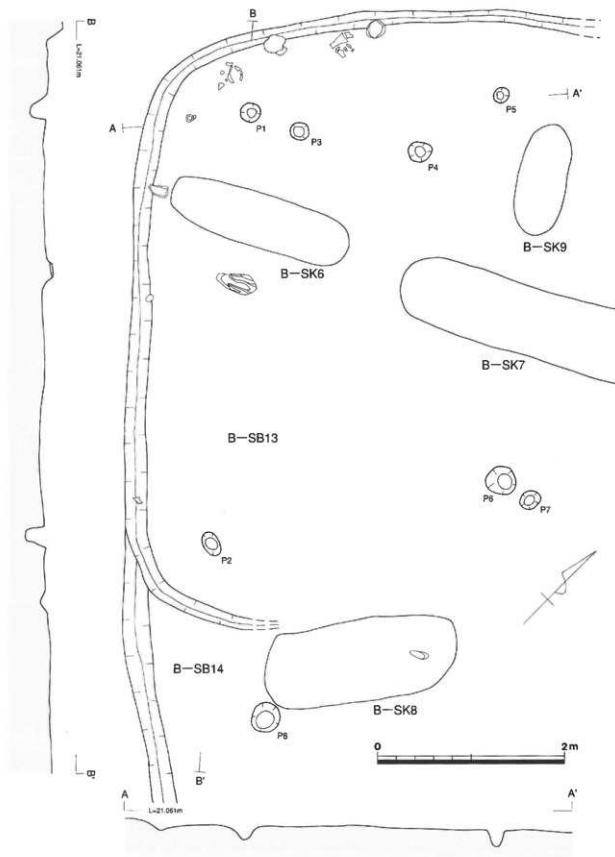
13. 竪穴住居址B-SB13

(1) 遺構 (挿図第50、挿図第60、図版第21の2)

竪穴住居址B-SB13は、B区内の東にあり、竪穴住居址B-SB8の北東に位置する。北東側は工事により削平されており、南東側は竪穴住居址B-SB14を切り込んでいる。さらに、竪穴住居址内は、土壌B-SK6、B-SK7、B-SK8、B-SK9の4基に攪乱されている。削平面から床面までの深さは14cmである。主軸方位はN-42°-Wである。確認できた南北壁の幅は5.90m、東西壁の幅は不明である。平面形は隅円方形または隅円長方形である。壁溝は現存している北西壁と南西壁で認められる。柱穴は推定4個であるが、P1(23×21×15)、P2(27×20×17)の2個が検出された。柱穴間の長さは4.72mを測る。炉址と貯蔵穴は検出されなかった。

(2) 遺物 (挿図第70の82~91、挿図第71の92~102、図版第29の4~6、図版第30の1~6)

82は、B-SB13の土壌埋土中から、83は、南西のビット中から検出したものである。いずれも深鉢の口縁部破片で外面に荒い横位の条痕が認められる。内面はヨコナデを施している。口端はナデ調整により角張らせ平坦面をなしている。84~87・89・90・92・93は、B-SB13の床面から検出した甕である。84~87・95は、いずれも口縁部から上胴部にかけてのものであり、ゆるく外反するくの字状口縁をもち、口端には棒状器具によるキザミが施されている。外面上胴部の調整は、ハケメのみが明確に残る86・87と、ハケメを施した後にミガキを加えた84・85がある。これからは底部に脚台部のある台付甕と思われる。89・90は、台付甕の脚台部である。脚台の上半部が柱状を成し、下半部で丸味をもたせた開く脚台である。92・93は、下胴部から脚部にかけての台付甕である。92は、脚の上半部が柱状をなし、下半部は反りをもち開いた脚台を持つ。下胴部は丸味を持ち、外面の調整は、ハケメを施した後にミガキを加えている。93は、脚台部の1/3が柱状をなし、92同様に反り気味に開く脚台を持つ。外面調整はハケメのみで仕上げられている。脚台の形状には、丸味をもたせ膨らむもの89・90と、反りをもたせ開くもの92・93がある。91は、B-SB13埋土中から検出した甕である。くの字状口縁で口縁部にゆるやかな稜をもつ。96~98・100・102はB-SB13の床面から検出した壺である。96は、上胴部から下胴部の破片で、やや器壁が厚い。肩部には上方からクシ状器具による幅の広い横線文、粗い沈線文、幅の狭い横線文の順に文様を施している。98は、上胴部破片で器壁の薄い96と同じ文様構成の土器である。97は、上胴部の破片で、クシ状器具による横線文2条、波線帯2条が交互に施されたものである。96・98は下方に重心をおく算盤玉形を呈したものである。100・102は、



挿図第60 竪穴住居址B-SB13・B-SB14実測図

壺の底部で平底ある。88・94・101は、埋土中から検出した壺の破片である。88は、口縁部で口端を丸く仕上げている。94は、口縁部で口端を角張らせ平坦面をつくり出している、この面にクシ状器具による羽状文をめぐらせ、口縁内側にも同器具による羽状文を施している。101は小形の壺の頸部から上胴部にかけてのものであり、丸味のある器形である。

B-SB13の土壌およびピット内から検出した82・83は、この地方の条痕系土器の壓王式土器である。83は、水神平式土器の深鉢と考えられる。また埋土中の遺物については、古式土師器の王江式土器の段階ととらえる事ができ、包含層からの混入が考えられる。

14、竪穴住居址B-SB14

(1) 遺構（挿図第50、挿図第60、図版第21の2）

竪穴住居址B-SB14は、B区内の東に位置する。竪穴住居址B-SB13の南東壁によって切られている。南西壁のわずか3mほどが現存するのみである。現存する壁には壁溝が認められる。柱穴や炉址、貯蔵穴は検出されなかった。

(2) 遺物（挿図第71の103・104）

103・104は、B-SB14の床面から見出されたB-SK18の土壌内埋土中から検出したものである。ともに、甕の口縁部破片で、103の口端にはヘラ状器具によるキザミが施されている。104は、間隔をあけて同器具による2条一組のキザミを施している。

B-SB14の埋土、床面からは時期を示す遺物は出土していない。しかし、竪穴内の土壌が本竪穴に付随する施設と考えるなら長床式土器の時期と考えられる。また竪穴の切り合い状態についてみると、B-SB14はB-SB13よりも古いと考えられる。

15、竪穴住居址B-SB15

(1) 遺構（挿図第50、挿図第61）

竪穴住居址B-SB15は、竪穴住居址B-SB13とB-SB14の北に位置している。竪穴住居址B-SB16に切られ、B-SB22を切ってつくられている。削平面から床面までの深さは8cmで、南西壁と南東壁の一部と北西壁の一部が現存している。いずれも壁溝は認められない。柱穴は推定4個であるが、P2（28×26×26）とP3（30×28×20）の2個が検出された。柱穴間の長さは2.90mを測る。平面形は扇張りのある隅円方形か隅円長方形である。炉址も貯蔵穴も検出されなかった。

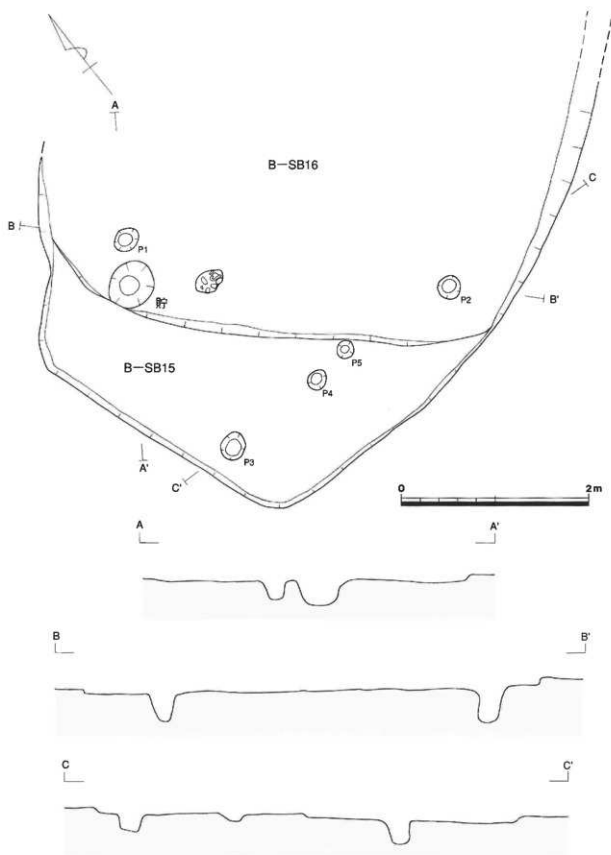
(2) 遺物

B-SB15からは遺物は検出されなかった。

16、竪穴住居址B-SB16

(1) 遺構（挿図第50、挿図第61）

竪穴住居B-SB16は、B区内の北東端にあり、竪穴住居址B-SB15を切っている。削平面から床面までの深さは、6～10cmである。北東側の2分の1以上は工事により削平されていた。そのため



挿図第61 竪穴住居址B-SB15・B-SB16実測図

南西壁と南東壁の一部と北西壁の一部が残存しているのみである。南西壁の長さは4.80mである。壁溝は認められない。主軸方位はN-45°-Eである。柱穴は推定4個であるが、P1(30×22×20)とP2(28×26×26)の2個検出され、柱穴間の長さは3.50mである。炉址は検出されなかった。貯蔵穴は西壁沿いにあり、平面形は楕円形、断面形は鍋底形で、規模は長径54cm、短径46cm、深さは26cmを測る。

(2) 遺物

B-SB16からは遺物は検出されなかった。

17. 竪穴住居址B-SB17

(1) 遺構 (挿図第50、挿図第62、図版第23)

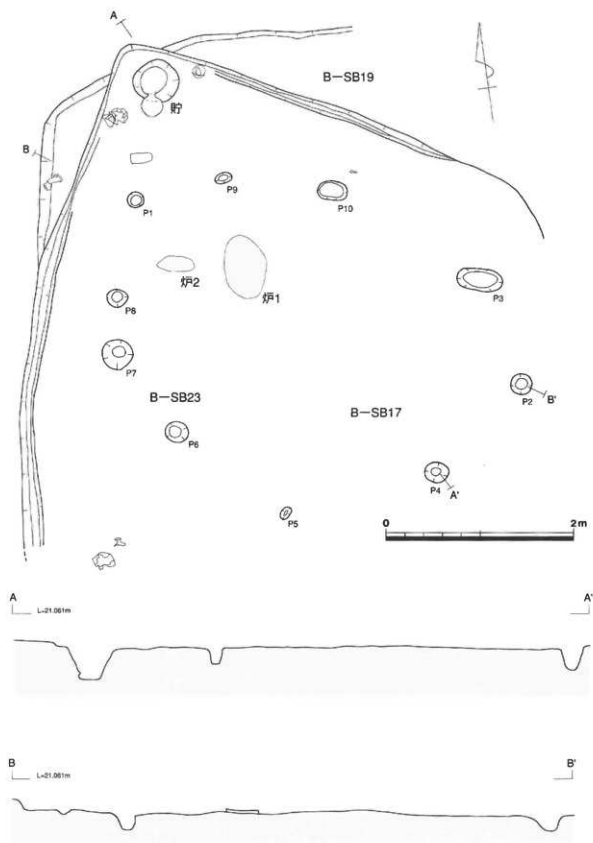
竪穴住居址B-SB17は、竪穴住居址B-SB13の西側に位置し、B区中央北側にある。東部と南部は工事により削平されていた。そのため北壁と西壁の一部が残存しているのみである。削平面から床面までの深さは12~16cmである。現存する北東壁と北西壁には壁溝が認められる。柱穴は推定4個で、そのうちP1(15×15×18)とP2(24×24×15)の2個が検出された。その長さは4.60mと今までの建物の中では規模が大きい。平面形は、方形または長方形であろう。炉址は、床面の北西寄りに2箇所認められた。貯蔵穴は、北西隅にあり、平面形は楕円形、断面形は鍋底形で、規模は長径50cm、短径44cm、深さ30cmを測る。

(2) 遺物 (挿図第71の105~107、挿図第72の108~124、図版第31の1~3、図版第35の6)

B-SB17のP3から出土した105は、深鉢の口縁部である。外面に山形につらなる条痕、内面には弧状の条痕を施している。口端には、二枚貝によるキザミを左回りに施している。106~110は、床面から検出した甕である。106・107は、くの字状口縁をもつものである。頸部は106が長く、107は短い。109・110は、台付甕の脚台部でやや膨らみをもたせ仕上げられている。108は、S字甕で口縁部は外方に大きく拡張し、口端は丸く仕上げられている。111~117・119・120は、床面から検出した壺である。111・112は、朝顔形に外反する口縁部をもつ。113は、口縁部から下胴部まで残る壺である。胴部の形状は球形を呈している。文の高い口頸部がくの字状に付き口端は丸く仕上げられる。114・116は、「柳ヶ坪型壺」の口縁部破片である。いずれも二重口縁である。内外面にはクシ状器具による羽状文を施している。117は、二重口縁の口頸部である。大形の壺で頸部は直立して立ち上がり折れ曲がる。口縁部は外反し、無文である。115・120は、壺の底部である。115の底面には凹みがあり、120の底面はケズリによる平底である。119は、小形で丸底に近い壺の胴部であり、球形に近い。122は、床面から検出した高坏の脚部である。柱状に伸びた脚上部から八の字状に開き脚端に至る形状を示す。118は、床面から検出した埴である。121は、B-SB17の床面から検出した鉢である。底部を欠くが丸底と考えられる。胴部は浅く、口縁部が強く外反する。

123は、床面から検出した凝灰岩製の砥石であり、自然石の平面に砥面が残る。124は、排土中から採集した、偏平な花崗岩の自然石を使用した石皿である。上面にやや凹む機能面が認められる。

B-SB17の床面から検出されたB-SB23のP3から出土した、105は、この地方における続水神平土器に比定されるものであった。124の石皿もこの時期の所産と考えられる。また、B-SB



挿図第62 竪穴住居址B-SB17・D-SB19実測図

17の時期を示す床面出土の遺物は青山式土器と考えられる。高坏の122、壺の117は畿内系の土師器であり、S字甕の108は尾張系の土師器である。

18、堅穴住居址B-SB18

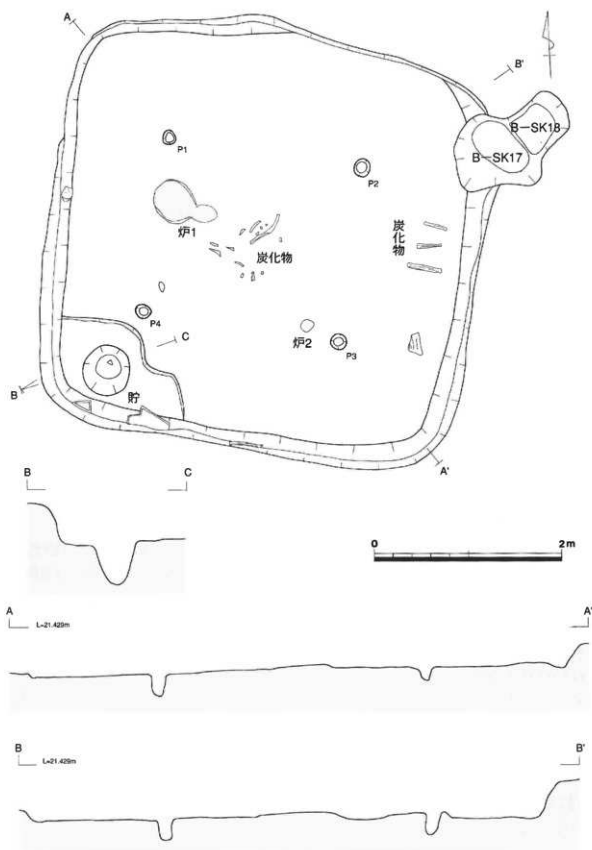
(1) 遺構 (挿図第50、挿図第63、図版第22)

堅穴住居址B-SB18は、B区の最も北側に位置する。北東隅が土塋B-SK17と土塋B-SK18に攪乱されているもののほぼ完全な形をとどめている。削平面から床面までの深さは24~38cmである。床面は東西の長さ4.20m、南北の長さ4.30m、面積約18㎡である。平面形は隅円方形である。主軸方位はN-12°-Eである。柱穴は4個でP1(16×14×24)、P2(19×18×22)、P3(19×18×22)、P4(14×17×24)である。柱穴間の長さは、P1~P2が2.10m、P2~P3が1.96m、P3~P4が2.12m、P4~P1が1.94mである。壁溝は、北西隅の一部と北東壁の一部を除いてすべて巡っている。炉址は中央西寄りに1箇所認められる。貯蔵穴は南西隅にあり、平面形はほぼ円形で断面形は底の深い鍋底形で、長径53cm、短径52cm、深さ46cmを測る。貯蔵穴のまわりは床面よりもわずかに下げてしつらえられている。床面の中央部や東壁の近くで長さ10~50cmの炭化した木材片を10本ほど検出した。火災を受けた可能性が考えられる。

(2) 遺物 (挿図第72の125~132、挿図第73の133~146、図版第31の4~6、図版第35の4)

125~131は、B-SB18によって切られたB-SK17・B-SK18の埋土中から検出したものである。便宜上本堅穴の関連遺物として説明する。125・126は、深鉢の口縁部破片である。125は、口縁部を肥厚させた、口端面には一条の沈線を施している。外面は条痕である。126は、口縁内面を面取りし稜をつくる。外面には条痕が認められる。127~138は、深鉢の胴部破片で、すべてに粗い条痕が認められる。132~146は、全て床面から検出した遺物である。132~135は、床面から検出した甕である。132・133は、丈が高くやや外反する口縁部から上胴部にかけてのものである。134は丈が低く、くの字状に折れる口縁部をもつ小形の甕である。135は、S字甕の脚台部で、器壁が薄く脚台部を折りかえして、帯状の端部をなしている。136は、壺の上胴部から底部にかけてのもので、器形は算盤玉形をなしている。上胴部には粗いクシ状器具による横線文が施されている。137は、二重口縁の壺の口頸部で、段を成し朝顔形に開く口縁部をもつ。口端は角張っている。内面には赤彩を施している。138は、二重口縁の壺の口縁部破片である。段を成し朝顔形に開く口縁部をもつ。口縁部下端には、断面三角状の突帯が認められる。139は、くの字状に折れる口縁部をもち、口端は角張って仕上げられている。口縁部と上胴部は赤彩を施している。140は、壺の底部破片で底面に凹みが認められる。141は、無頸壺の口縁部で口端に接して、クシ状器具による斜位の刺突文帯をはさんで波状文を施している。142は、小形の坏部にもつ高坏である。坏部内外面および脚部外面をヘラミガキ調整している。脚部は強く外反し、脚部の径が坏部径の3/2と広い。脚部には上下2段6ヶ所の透かし孔が認められる。134・145は、高坏の脚部である。いずれも脚端を欠き薄いクシ状器具による平行線を施している。脚部には3ヶ所の透かし孔を穿っている。144もおなじく高坏の脚部で脚端を欠く。外面はヘラミガキ調整で3ヶ所に透かし孔が認められる。

146は、花崗岩製の砥石である。4ヶ所に砥面が認められる。



棒図第63 竪穴住居址B-SB18実測図

B-SB18の北東隅に存在した土壌は、条痕系土器の櫛王式土器に比定できるものである。また、床面出土の壺136・141については、弥生時代中期後半の長床式土器の可能性もある。その他の遺物については、142～145が欠山式土器（註5）と考えられるものでB-SB18の時期を想定しうるものと考えられる。のこりの遺物は王江式土器の様相をもつものであった。また135は尾張地方、137・138の壺は近畿地方からの搬入品と考えられる。

19、堅穴住居址B-SB19

（1）遺構（挿図第50、挿図第62、図版第23の1）

堅穴住居址B-SB19は、B区内中央に位置し、堅穴住居址B-SB17に切られている。堅穴住居址B-SB17によって大半が切られたうえに東側は工事により削平されている。平面形は北壁と西壁を見る限り、隅円方形または隅円長方形であろう。削平面から床面までの深さは、14cmである。壁溝は認められない。柱穴と貯蔵穴は検出されなかった。

（2）遺物（挿図第73の147～152）

147は、B-SB19の床面から検出した台付甕の脚台部である。脚台端を角張らせて仕上げている。148は、床面から検出した壺の上胴部破片である。クシ状器具による横線文帯の間に、ヘラ状器具による鋸歯文を施し、下端に同器具による刺突文列を巡らしている。鋸歯文部に記されている。149は、床面から検出した、壺の底部である。150も、床面から出土した高坏の脚部である。3ヶ所に透かし孔が認められる。151・152は、埋土中から検出した。

151は、黒曜石製の凹基無茎鉄である。152はチャート製の横長剥片であり使用痕がある。

本B-SB19は、B-SB17によって切られていた。床面から出土した土師器は王江式土器であろう。また、埋土中から出土した石器については、縄文時代から弥生時代の所産と考えられる。

20、堅穴住居址B-SB20

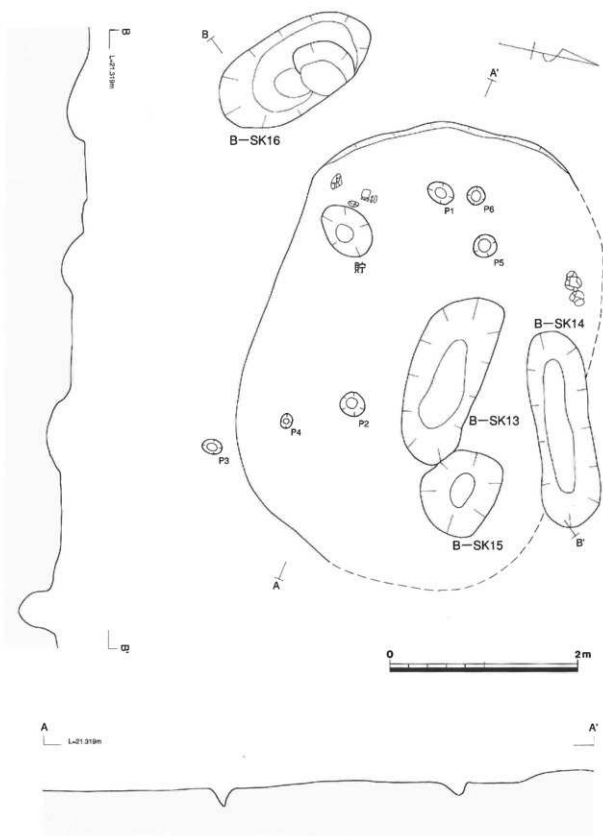
（1）遺構（挿図第49）

堅穴住居址B-SB20は、B区内の最も西に位置している。重機により表土削平をした。黒色有機土層の掘り方は、隅円方形を呈していた。黒色土層は、削平面から床面までの深さが数cmであった。壁の立ち上がりはあったものの柱穴も炉址も貯蔵穴も検出されなかった。

（2）遺物（挿図第73の153～157）

153は、B-SB20床面から出土したS字甕の口縁部破片である。間のびしたS字口縁部を呈し、上胴部には横線文が認められる。155は、やはり床面から検出した台付甕の脚台部である。脚台端は丸味をち仕上げられている。154は、床面から検出した壺の底部破片である。156も床面から検出した高坏の脚部である。3ヶ所に透かし孔が認められる。157は、埋土中から検出した高坏の脚部である。柱状の脚部で脚端を欠き、脚にはクシ状器具による横線文が施されている。

B-SB20床面から検出された土器は、王江式土器と考えられる。埋土中から検出した157は、弥生時代後期の寄道式土器である。



挿図第64 竪穴住居址B-SB21実測図

21、竪穴住居址B-SB21

(1) 遺構 (挿図第50、挿図第64、図版第25の1)

竪穴住居址B-SB21は、B区内の北側にあり、竪穴住居址B-SB18の東に位置する。土壌B-SK13、B-SK14、B-SK15の3基の土壌に攪乱され、その上北側半分は工事による削平で壁が明確でなかった。削平面から床面までの深さは4~10cmである。床面は東西4.74m、南北は不明である。壁溝は認められない。平面形は楕円形であろう。主軸方位はN-10°-Eである。柱穴はP1(22×20×16)、P2(24×23×23)、P4(16×14×8)、P5(25×25×7)、P6(22×20×7)の5個が検出された。そのうち主柱穴はP1とP2の2個で、柱穴間の長さは2.50mである。貯蔵穴は南西隅にあり、平面形は楕円形、断面形は鍋底形であり、その規模は長径64cm、短径48cm、深さ22cmである。炉址は検出されなかった。

(2) 遺物 (挿図第74の158~164)

すべて、B-SB21の床面から検出したものである。158・161は甕の口縁部から胴部にかけての破片であり、いずれも口端にヘラ状器具によるキザミメを施している。158は、ゆるやかに反る厚手の口縁部をもち、胴部の器形は無花果形をなすものと思われる。外面はナデ調整で仕上げられている。159・160は、甕の底部から上胴部破片である。いずれも外面に幅の広いハケメを施している。159の底部は平底で、下胴部はやや直線的に立ち上る。162・163は、甕の上胴部破片である。162は、5条1組のクシ状器具による横線文が2条認められ、その間に大きく波うつ連弧文が施されている。163は、ヘラミガキで調整されており無文である。164は、甕の底部から上胴部にかけてのものである。胴部は全面横位に近いヘラミガキ調整されており、底部は平底である。

B-SB21の時期は、荒いハケ目で仕上げた甕の159・160、および大柄な文様を施す甕の162などから、弥生時代中期中葉の下長山式土器(註6)にあたるものであろう。

22、竪穴住居址B-SB22

(1) 遺構 (挿図第50)

竪穴住居址B-SB22は、B区内の東にあり、竪穴住居址B-SB13を切っているが、B-SB15とB-SB16に切られている。表土を削平したところ隅隅で四角形をした黒色有機土の拡がりが見確認された。削平面から床面までの深さは5~6cmである。壁の立ち上がりは認められたものの明確に柱穴らしきピットは確認できなかった。精査したが焼土や炭化物は検出されなかったし、貯蔵穴も検出されなかった。

(2) 遺物 (挿図第74の165・166)

2点の土器破片が出土している。いずれもB-SB22の床面から検出した遺物である。165は、受口状に開く甕の口縁部破片である。受口状に折れまがる口縁部外面には、クシ状器具による横線文が施されている。

166は、台付甕の脚台部破片である。外面には縦位の荒いハケメが残されている。脚台端は面取り

して角状に仕上げられている。

B-S B22の時期は、弥生時代中期後葉の長床式土器の時期にあたる。

23、住居址B-SB23

(1) 遺構 (挿図第50、挿図第62)

住居址B-S B23は、B区の発掘調査中には竪穴住居址(B-S B)として確認できなかったが遺物の確認、図面の精査をする中で、想定された住居址である。竪穴住居址B-S B17の床面に認められた柱穴は10本である。柱穴P1 (15×15×18)、P2 (24×24×15)、P3 (50×26×14)、P4 (25×23×24)、P5 (15×18×12)、P6 (25×25×23)、P7 (36×36×20)、P8 (23×20×13)、P9 (21×18×19)、P10 (30×20×24)の柱穴群を結んだ楕円形の住居址と考えられる。石器はこの住居址に伴うものと考えられる。床面は長軸4.62m、短軸3.50mである。主軸方位はN-50°-Eである。炉址を竪穴住居址B-S B17のものとしたが、この住居址の炉址とも考えられる。柱穴P10とP3は他の柱穴と形が異なりまた、長径30~50cm、短径20~26cm、深さ14~24cmと大きなものである。柱穴P10とP3の柱穴間の長さは、1.80mである。

(2) 遺物 (挿図第74の167)

167は、チャート製の横長剥片で、側面に使用痕が認められる。剥片の側面を切断して刃器としたものである。B-S B17のP3からは、弥生時代前期の土器が出土している。

第2節 土壌

B区で検出された土壌(B-S K)は17基である。B区の南西側で4基(B-S K1~B-S K4)の土壌が散在していたのに、台地の北側縁端部にあたる北東側では13基の土壌がまとまって検出された。北東側の一群はB-S K5~B-S K10・B-S K12~B-S K18の13基である。

土壌の埋土や床面から遺物の検出された土壌は、B-S K4とB-S K7・B-S K10の3基である。遺物の検出されなかった土壌はB-S K1~B-S K3・B-S K5・B-S K6・B-S K8・B-S K9、B-S K12~B-S K18の14基である。遺物の検出されなかった土壌は時期が不明である。

1、土壌B-SK1 (挿図第49)

土壌B-S K1は、B区内の西端に位置している。平面形は楕円形で、規模は長径1.55m、短径1.18mである。長軸はN-86°-Wである。

2、土壌B-SK2 (挿図第49)

土壌B-S K2は、竪穴住居址B-S B3の南西に位置している。平面形は長楕円形で、規模は長径1.30m、短径0.60m、深さ27cmである。長軸はN-68°-Wである。

3、土壌B-SK3 (挿図第49)

土壙B-SK3は、堅穴住居址B-SB3の住居址の外側で東壁に接して所在している。平面形は楕円形で、規模は長径2.00m、短径0.86mである。長軸はN-63°-Eである。

4、土壙B-SK4

(1) 遺構 (挿図第50、挿図第65、図版第18の2)

土壙B-SK4は、堅穴住居址B-SB8の北東隅から北東1.3mに位置している。平面形はほぼ円形、断面形は鍋底形でその規模は長径2.30m、短径2.14m、深さ54cmである。長軸はN-5°-Eである。

(2) 遺物 (挿図第74の168~170)

168~170は、いずれもB-SK4の埋土中から検出したものである。168は、縦長剥片の側面に使用痕が認められる。169は、横長剥片の側面に使用痕が認められるものである。170は、自然円石を縦に打ち割り、打面をつくり打面調整を行なった後に剥片を摘出しており、剥片の摘出面は2面有り、部分的に自然面が残っている。3点とも表面が白色化したもので、石質は流文岩と考えられる。

本B-SK4から出土した遺物は、後期旧石器時代末葉の石器類と考えられる。また、168・169の剥片は側面使用痕から、サイドスクレーパーとして使用されたものと考えられる。

5、土壙B-SK5 (挿図第50、挿図第65)

土壙B-SK5は、堅穴住居址B-SB13とB-SB14の南西壁の交点より1.3m南西に位置している。平面形は円形で、断面形は鍋底形、規模は長径1.88m、短径1.72m、深さ60cmである。長軸はN-51°-Wである。

6、土壙B-SK6 (挿図第50)

土壙B-SK6は、堅穴住居址B-SB13内の南西壁寄りに所在する。平面形は長楕円形で、規模は長径1.98m、短径0.60mである。長軸はN-56°-Eである。

7、土壙B-SK7 (挿図第50)

土壙B-SK7は、堅穴住居址B-SB13内の中央に位置している。平面形は不整形で、規模は長径3.42m、短径0.74mである。長軸はN-54°-Eである。

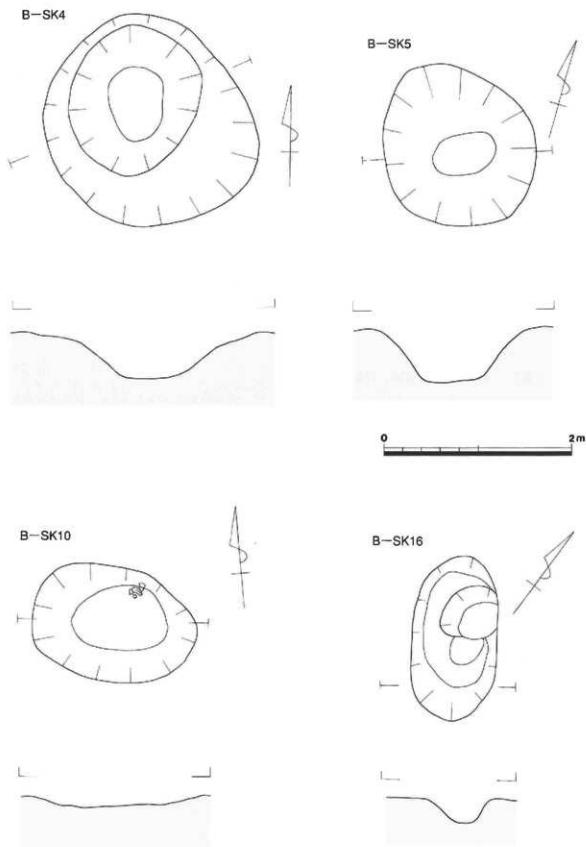
遺物は図示しなかったが深鉢の底部と条痕文系土器が出土している。

8、土壙B-SK8 (挿図第50)

土壙B-SK8は、堅穴住居址B-SB14内にあり堅穴住居址B-SB13の南東に接して所在する。平面形は長楕円形で、規模は長径2.04m、短径0.92m、深さ6cmである。長軸はN-25°-Eである。

9、土壙B-SK9 (挿図第50)

土壙B-SK9は、堅穴住居址B-SB13内の北西壁寄りに位置する。平面形は倒卵形で、規模は長径1.22m、短径0.52mである。長軸はN-39°-Wである。



挿図第65 土坑B-SK4・B-SK5・B-SK10・B-SK16実測図

10、土壌B-SK10

(1) 遺構 (挿図第50、挿図第65)

土壌B-SK10は、B区内の中央北側に位置している。平面形は倒卵形で、断面形は皿状を呈しており、規模は長径0.65m、短径0.46m、深さ16cmである。長軸はN-40°-Eである。

(2) 遺物 (挿図第75の171~174) (挿図第34の14)

171~173は、全てB-SK10の埋土中から検出したものである。171~173は、条痕系土器の深鉢の破片である。171は、口縁部でやや外反した角状の口端をもち、口端は平坦面を造り出し、この面に一条の沈線を施している。外面は横位の条痕が認められる。172・173は、胴部で横位に近い条痕が施されている。

174は、埋土の上部から検出した鉄製の鋤先である。長方形に近い鉄板の両側面を折り返ししている。折り返しの上端は狭く刃部が広く、ハの字状を呈している。刃部は弧状を呈している。折り返し部内には、鉄錆が付着した木質部が残存しており、厚さ約1.2cmの木製部に装着されたものと想定される。

本B-SK10から出土した171~173は、条痕系土器の壺式土器にあたる。また鋤先174の時期は、古墳時代前期から中期にその位置をあてたい。

11、土壌B-SK12 (挿図第50)

土壌B-SK12は、B区内の中央北寄りで、竪穴住居址B-SB13とB-SB21の間に位置する。平面形は楕円形で規模は長径1.30m、短径0.70mである。長軸はN-47°-Wである。

12、土壌B-SK13 (挿図第50)

土壌B-SK13は、B区内の中央北の竪穴住居址B-SB21内の中央に位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.56m、短径0.80mである。長軸はN-73°-Wである。

13、土壌B-SK14 (挿図第50)

土壌B-SK14は、B区内の中央北の竪穴住居址B-SB21内の北に位置している。平面形は長楕円形で規模は長径1.34m、短径0.56mである。長軸はN-69°-Eである。

14、土壌B-SK15 (挿図第50)

土壌B-SK15は、B区内の中央北の竪穴住居址B-SB21内に位置している。平面形は楕円形で、規模は長径96cm、短径76cmである。長軸はN-50°-Wである。

15、土壌B-SK16 (挿図第50、挿図第65)

土壌B-SK16は、B区内中央北寄りの竪穴住居址B-SB21の南西隅から南西1.3mに位置している。平面形は長楕円形、断面形は鍋底形で、規模は長径1.78m、短径0.90mである。長軸はN-34°-Wである。

16、土壌B-SK17 (挿図第50)

土壌B-SK17は、B区中央北端の堅穴住居址B-SB18の北東隅を切り、B-SK18も切っており、平面形は不整形で、規模は長径82cm、短径80cmである。長軸はN-46°-Wである。

17、土壌B-SK18 (挿図第50)

土壌B-SK18は、B区中央北端の堅穴住居址B-SB18の北東隅に接し、土壌B-SK17に切られて所在する。平面形は不整形で、規模は長径64cm、短径50cmである。長軸はN-57°-Eである。

第3節 遺物包含層

遺物を包含している地層は、黒色有機土層である。黒色有機土層は、堅穴住居址(B-SB)や土壌(B-SK)、土壌墓(B-SZ)、溝(B-SD)などの遺構の所では厚く堆積している。黒色有機土層の広がりは、北に行くに従いわずかに厚さを増している。

遺物を包含している層は、表土層である耕作土層でも認められた。耕作土層中の遺物は、重機により排出された土の中から検出されているので表採資料として扱うことにした。

1、黒色有機土層出土遺物 (挿図第75の175~191、挿図第76の192~218、挿図第77の219~229・231~233) (図版第32の3~6、図版第33の1~6、図版第34の7~10)

175は、口端を欠く深鉢の口縁部破片である。口縁下端に段をもち、二枚貝による刺突文を斜位に施している。この地方の縄文時代早期後葉のハツ崎Ⅰ式土器(註7)の可能性がある。176~185は、深鉢の口縁部から胴部にかけての破片である。176~181は、口縁部破片で口端は平坦に仕上げている。外面には横位の条痕が認められる。176は、マメツがはげしく外面調整痕は不明だが、かすかに条痕が認められる。182~185は、胴部破片であり斜位の条痕が認められる。これらの土器は、条痕系土器の榎王式土器に比定されよう。186~190は、甕である。186は、脚端部を欠く、台付甕で、胴部より広い口縁部をもち、柱状の脚台部が付くものである。ゆるやかに外反する口縁をもち、口端は無文である。187・188は、口縁部から上胴部にかけての破片である。ゆるやかに外反する口縁部をもち、口端には棒状器具によるキザミが施されている。189・190は、台付甕の脚台部である。189は、柱状の脚台下部からやや丸味をもち内彎する。190も同器形と考えられ、脚台上部が欠けている。これらの土器は、弥生時代中期後葉の長床式土器である。191~201は、甕の破片である。192~194は、口縁部から上胴部にかけてのもので、くの字状口縁をもつ一群である。やや立の長い口頸部をもち、口端は丸味をもたせ仕上げている。195・196は、S字甕の口縁部破片である。195の口縁部は屈曲し、口端を面取りして平坦面をつくりだしている。196は、口縁の屈曲がやや開き、口端は、丸味をもたせ仕上げられている。掘曲部外面には、クシ状器具によるキザミが施されている。191・197~201は台付甕とS字甕の脚台部である。191・197・199・200は、台付甕の脚台部で、小形の191・200と大形の197・199とがある。197をのぞき脚台端を角張らせ平坦面をつくりだしている。198・201は、S字甕の脚台部である。198の脚台端は折り反されている。これらの甕は、古墳時代前期の王江式土器の時

期と考えられる。

202・203は、壺の上胴部破片である。202は、クシ状器具による大柄な波線文の上に同器具による連弧文を施したものであり、弥生時代中期中葉の下長山式土器である。203は、クシ状器具による、横線文を上下に施し、その間に巾の狭い波線文を施したものであり、弥生時代中期後葉の長床式土器である。

204～215は、壺である。204・207は、口縁部である。口端近くで折れ曲り内面が平坦になるものであり、口端は上下に拡張している。207は、内面の平坦部にクシ状器具による細な波線帯が認められる。205は、直行する口縁部の上下に拡張した口端をもつもので、無文である。211は、「柳ヶ坪型壺」の口縁部で、口端が欠けている。外内面にはクシ状器具による羽状文を巡らせている。212は、口端部を上方にやや受口状に拡張した口端をもつ。拡張部外面にはクシ状器具による薄い横線を施し、4条1組の棒状波文を付けている。213は、口縁部破片であり内外面に赤彩を施している。206は、胴部破片でクシ状器具による横線文と羽状文が認められる。208は、上胴部破片でクシ状器具による横線文が施されている。209は、上胴部破片でクシ状器具による横線文下に同器具による刺突文列が施されている。210は、上胴部破片で外面に赤彩が施されている。214は、小形の壺で口縁部を欠き、底部は平底である。215は、頸部の短い口縁部をもつもので、胴部の形状は最大径を上胴部におく平底の壺である。これらの壺は、古墳時代前期の王江式土器の時期と考えられる。216～218は、高坏である。216は坏部破片で脚部から平行に立上げ大きく開くものである。217・218は、脚部の破片で脚端に向い外反する。いずれも脚端を欠いており、34所に差し孔をもつ。219～222は、埴である。219は、丸味をおびた埴の口縁部で口端は丸く仕上げられている。口縁部下方にヘラ状器具による沈線が一条認められる。221は、立ちの高い平底の底部をもつ埴で、やや丸味をもつて立上り口端に至る。口端は面取りをして角張っている。220は、平底の底部をもち、内彎気味に、立ち上る胴部をもつ。口端は丸く仕上げられている。222は、底部から胴部の破片であり口縁部を欠く。立ち上りはゆるやかにカーブし、底面は凹んでいる。これらは古墳時代前期の王江土器と考えられる。

228は、器種不明の管状土製品である。表面はハケメ調整の後に、ナデ調整を施しており棒状器具により内部を管状に仕上っている。両端は欠損しており、器壁につながる広がりを見せる。注口が把手の機能をもつものと考えられる。胎土、色調、調整から土師器としてよいであろう。

224・225は、いずれも須恵器である。224は、器種不明品で、蓋坏の蓋状をなすものである。口端は角張り平坦面を残す。天井部に円孔が認められる。225は、蓋坏の身であり体部は丸味をもち、口端を欠く。古墳時代後期の第4型式にあたるものである。

226～229・231～233は、石器類である。226は、南極打法で作った石核である。形状は隅円台形を呈し、石質は、チャートまたは、火成岩性の岩石と考えられる。227～229は、いわゆる短冊形の打製石斧である。227の中央やや上には、柄装着用のえぐりが認められる。石質は塩基性岩である。228・229は、刃部が広がるもので、228の石質は塩基性岩、229の石質は不明である。231は、石斧である。風化がすすみ、敲打痕が認められるが刃部はさだかではない。石質は塩基性岩である。232は、敲石である。長円形の側面に打痕が残る。石質は塩基性岩である。233は黒灰色を呈した白玉である。石質は不明である。これらの石器類は、B区から多く出土した条痕系土器の樫王式土器に伴うものと考えられる。

2 表採遺物（耕作土層）（挿図第77の230・234～237）

235は、甕の口縁部から上胴部にかけてのものである。ゆるやかに反る口縁をもち、口端は無文である。弥生時代中期の下長山式から長床式にかけてのものと思われる。234は高坏の坏部である。大きく外反し、たれ下る口縁部をもち、口端を細めて丸く仕上げている。この高坏は幾内地方に見られる器形である。236は、裏面に布目の付く平瓦破片である。237は、行基焼の山茶碗の口縁部である。時期は行基焼第3形式（註8）にあたる。

230は、砂岩製の砥石である。自然石の平坦面に砥面をもつ。

註1 杉崎 章『柳ヶ坪貝塚』愛知県知多郡横須賀小学校 1953

註2 久永春男、齋藤嘉彦、杉浦茂治『王江遺跡』『愛知県碧海郡高浜町の先史古代・遺跡』高浜町誌編纂委員会 1966
齋藤嘉彦『王江式土器について』『於御所遺跡』岡崎市教育委員会 1974

齋藤嘉彦『伊保遺跡出土の王江式土器』『伊保遺跡』豊田市教育委員会 1974

註3 小野田勝一、立松彰、森田勝三他、『古代の塩づくり』渥美町郷土資料館 1993

註4 芳賀 陽『青山貝塚－渥美半島における古代漁村の土器』『古代学研究20』1955

註5 久永春男『弥生式土器』『瓜郷』豊橋市教育委員会 1963

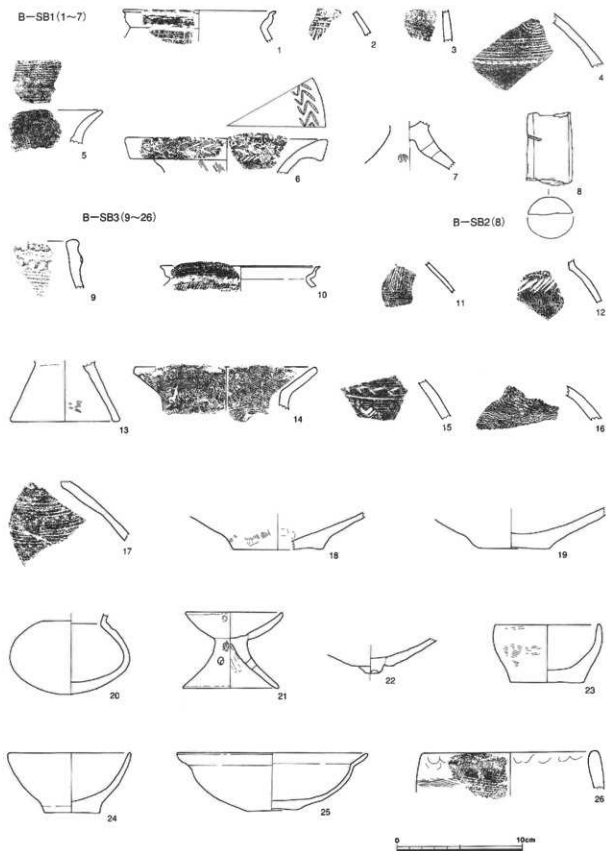
久永春男『東海地方（土器型式の推移と地域圏）』『新版考古学講座』雄山閣出版株式会社 1969

註6 久永春男、『東海』『日本考古学講座第4巻』河出書房新社 1955

註7 紅村弘・増子康真他『東海先史文化の諸段階』（資料編Ⅰ）1977

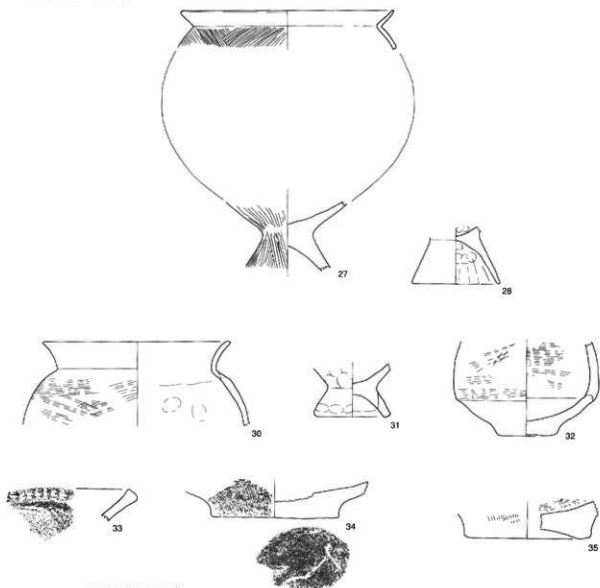
註8 久永春男・芳賀陽『渥美半島古窯址出土行基焼の編年』『豊橋市大岩町北山古墳群・豊橋市植田町大膳古窯址群』豊橋市教育委員会 1968

伊藤恵・芳賀陽『豊橋南西部古窯群出土遺物の編年』『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第81集豊橋南西部古窯址群』豊橋市教育委員会 2005

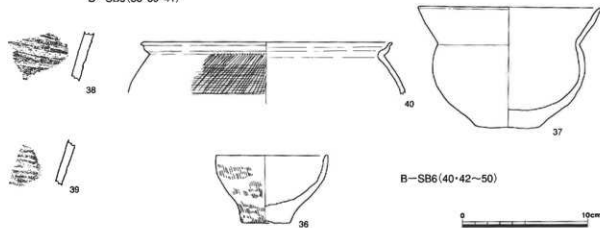


挿図第66 B区出土 遺物実測図1 (SB1・SB2・SB3)

B-SB4(27・28～37)



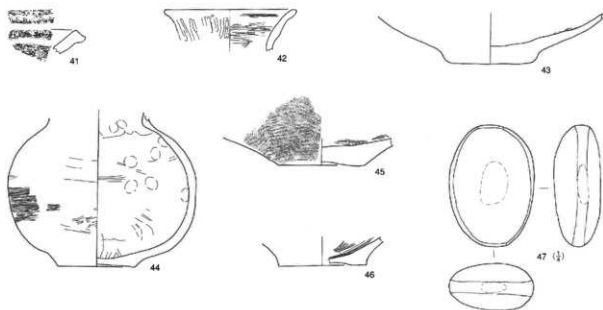
B-SB5(38・39・41)



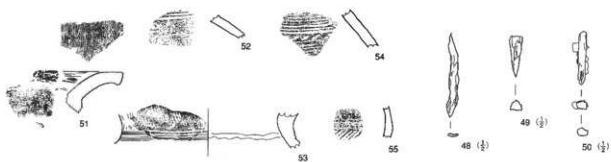
B-SB6(40・42～50)



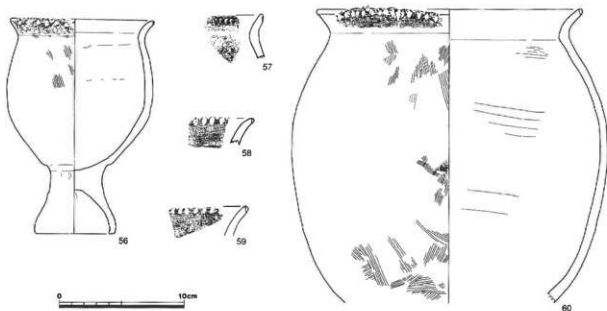
挿図第67 B区出土 遺物実測図2 (SB4・SB5・SB6)



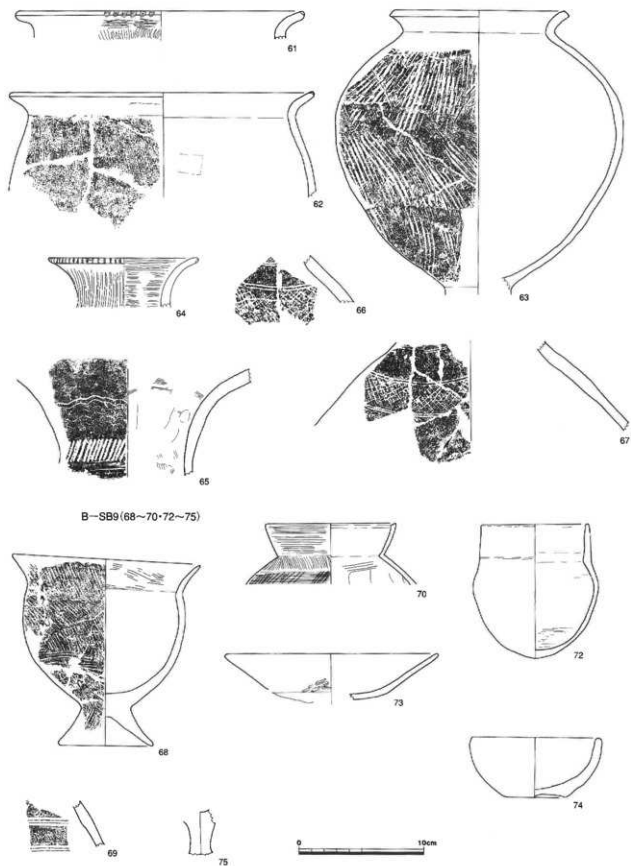
B-SB7(51~55)



B-SB8(56~67)

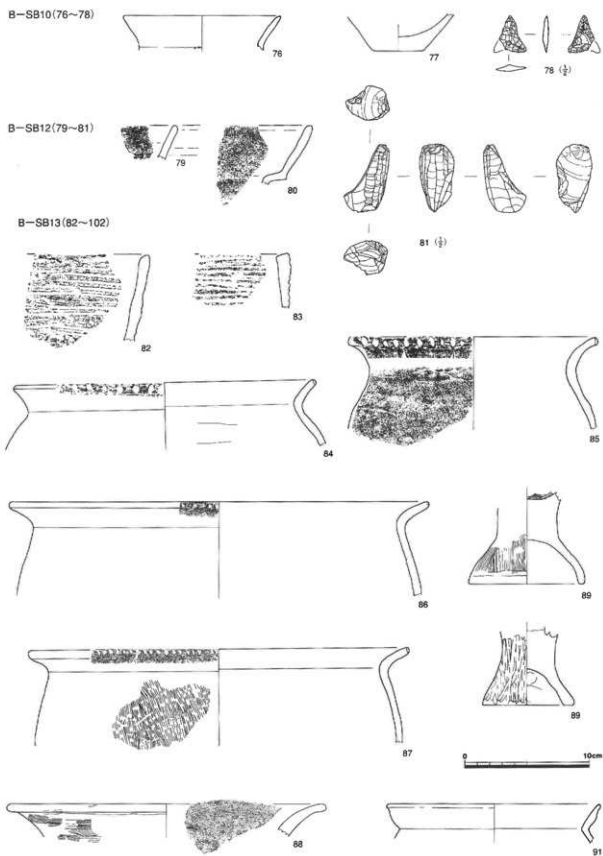


挿図第68 B区出土 遺物実測図3 (SB6・SB7・SB8)

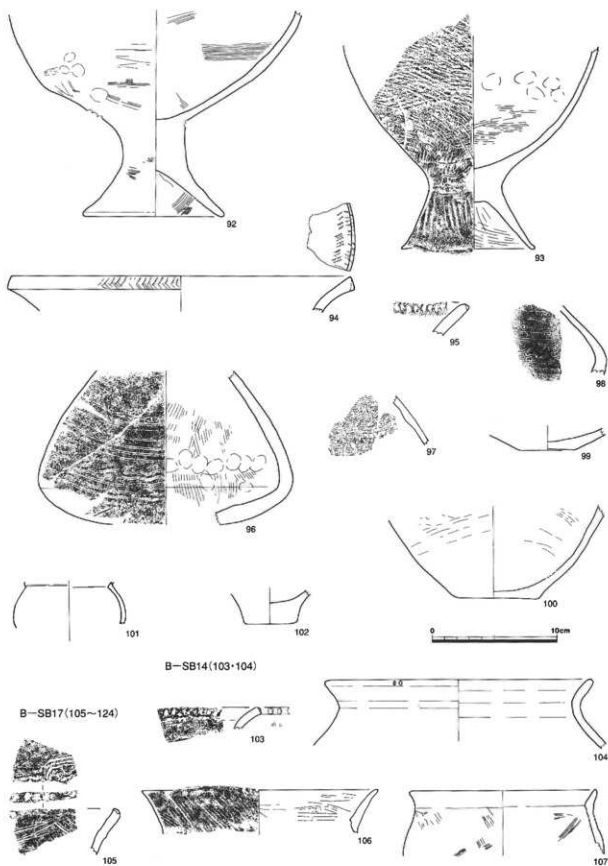


B-SB9(68~70・72~75)

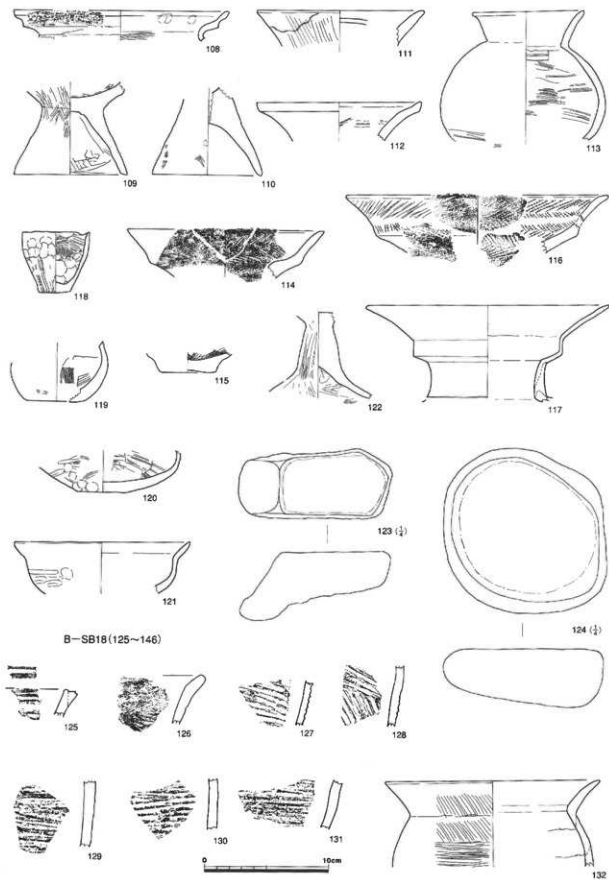
挿図第69 B区出土 遺物実測図4 (SB8・SB9)



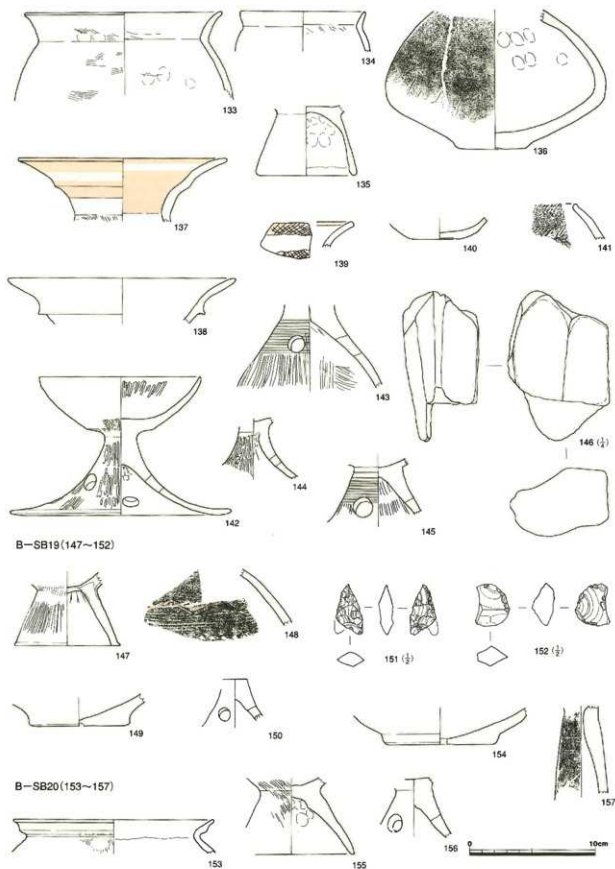
挿図第70 B区出土 遺物実測図5 (SB10・SB12・SB13)



挿図第71 B区出土 遺物実測図6 (SB13・SB14・SB17)

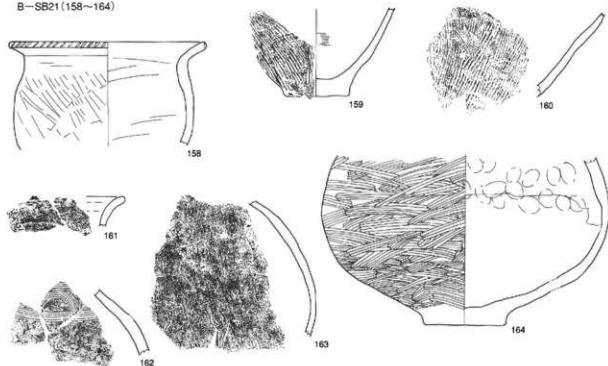


挿図第72 B区出土 遺物実測図7 (SB17・SB18)

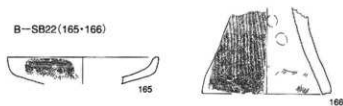


挿図第73 B区出土 遺物実測図8 (SB18・SB19・SB20)

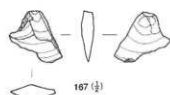
B-SB21(158~164)



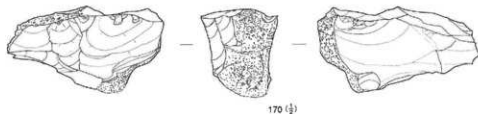
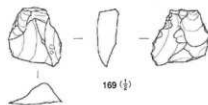
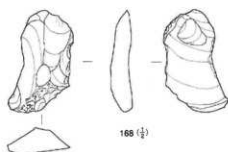
B-SB22(165・166)



B-SB23(167)

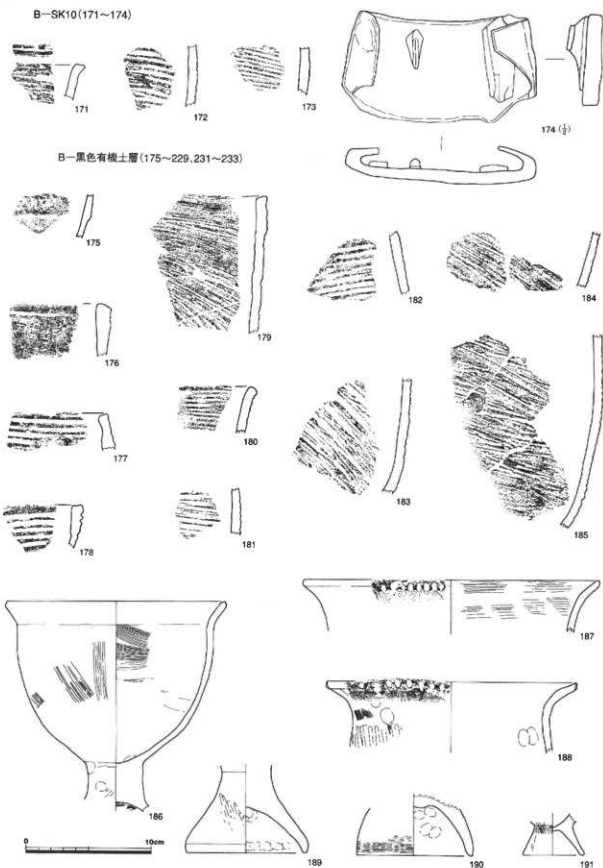


B-SK4(168~170)

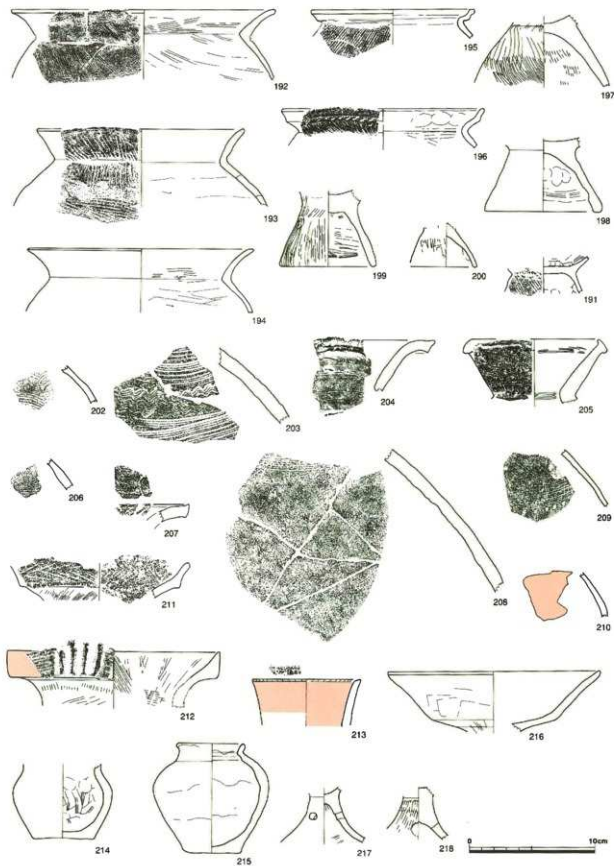


0 10cm

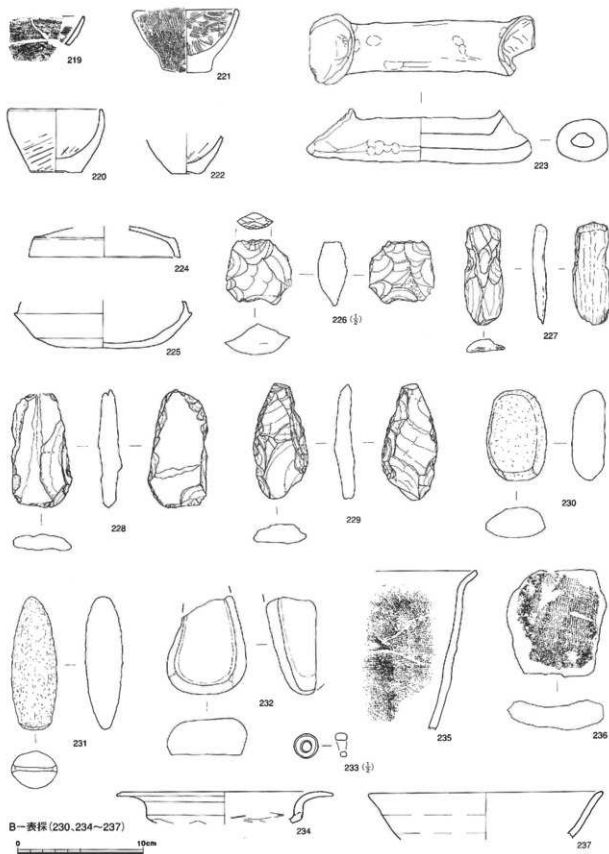
挿図第74 B区出土 遺物実測図9 (SB21・SB22・SB23・SK4)



挿図第75 B区出土 遺物実測図10 (SK10・黒色有機土層)



挿図第76 B区出土 遺物実測図11 (黒色有機土層)



挿図第77 B区出土 遺物実測図12 (黒色有機土層・表探)